

# 古墳の渡り土手

## —近畿地域を中心として—

長 友 朋 子  
園 原 悠 斗  
前 田 仁 暉  
山 崎 公 輔

### はじめに

古墳時代になると大王墓や首長墓など大規模な墳墓が築造されるようになる。その墳丘は程度の差こそあれ、土を盛ることによって築造され、土を採取した場所は周濠となった。そして、周濠には墳丘と周囲とをつなぐ渡り土手と呼ばれる高まりが削り残された。この削り残された部分は、外部と墳丘をつなぐ道としての役割や、高低差の大きい周濠にまんべんなく水をたたえる堰としての役割などが想定されているものの、その築造目的についてはいまだ明確ではない。古墳の施設の中ではもっとも目立ちにくい部分であるが、墳丘築造や儀礼祭祀の解明に深く関わることが推測される。そこで、本稿では古墳時代を中心とする近畿地域の古墳の渡り土手を集成し、その役割について考察したい。なお、外部と墳丘を結ぶ渡り土手は弥生時代の墳丘墓に起源をもつが、本稿では前方部が周濠により切り離される、前方後円墳出現以降の渡り土手を対象とする。

### 1. 渡り土手に関するこれまでの研究

古墳の墳丘と周囲とを渡す施設は「渡り土手」や「陸橋」「渡土堤」などと呼ばれる。この施設を外部と墳丘内部とを行き来する道と理解するならば、墓道の形成とも深く関連する。古くより前方後円墳は、喜田貞吉や梅原末治による前方部祭壇付加説、高橋健自による前方部玄関説などのように、その前方部が祭壇あるいは入口にあたるとする考えが示されてきた（浜田 1936）。かつて、小林行雄も前方部と後円部の高さを詳細に比較した後、後円部を神の世界、前方部を人の世界ととらえた（小林 1937）。都出比呂志や近藤義郎は、弥生時代終末期の墳丘において道として成立した部分が、古墳時代の前方部となり方形壇としての役割に変化したと理解した（都出 1979、近藤 1983・1999）。前方部の機能についての是非はともかく、前方部が外部と切り離されると渡り土手が形成されるようになるのは確かである。

和田晴吾は、墳丘へ上がる出入口は墳丘側面の周辺にあり、埋葬時に参列者が出入りした儀礼用の通路はくびれ部周辺に設けられた渡り土手であろうと考えた（和田 2009）。そして、渡り土手から前方部平坦面へ入り、後円部墳頂の埋葬部へと進む道程を想定している。加えて、造り出しは出入口付近における儀礼の場が墳丘側に取り込まれ固定化した施設とみなされている。また、くびれ部周辺以外の渡り土手は墳丘築造時に掘り残され、作業用として利用された後、最終的に撤去された

という。つまり、和田は、渡し土手は基本的に、盛土や葺石、埴輪などの資材を運ぶ作業用の道であるが、くびれ部付近の一部は葬送儀礼の通路としても使用されたと考えたのである。

一方で、墳丘設計という異なる視点からの理解も提示されている。堅田直は、古墳時代前期の丘陵部切り出しによる墳丘整形が、中期になると、洪積台地の縁辺地を利用し濠を掘った土を盛り上げる墳丘築造へ変化すると理解した（堅田 1971）。その際、濠を掘ると湧水点に達する場合のあることから排水が必要となり、いったん台地縁辺部を開放した状態で排水しながら墳丘を形成し、堤を築造して貯水するという築造過程を想定した<sup>1)</sup>。行燈山古墳のように周濠底のレベルが一定ではなく、渡し土手を挟んで階段状に水を湛える前期古墳がみられるが、それに関して、堅田は後世に改変された姿であるとし、水を湛える濠の出現は中期に渡来人によってもたらされた土木技術によるものと考えた。これに対し、白石太一郎は、その後の宮内庁による調査成果をふまえ、濠底に水成堆積層のあること、現在の渡し土手に設定したトレンチで古墳築造当時の渡し土手が検出されたことから、行燈山古墳の濠を築造当時から水を湛えたものとし、渡し土手の存在も認めている<sup>2)</sup>（白石 1983）。さらに、行燈山古墳については、水位の異なる濠を渡し土手で画することで、全体として鍵穴状の形態に整える役割を果たしたという理解もなされている（岸本 2005）。

このような視点からみると、渡し土手は、高低差の大きい周濠を区切り、周囲にまんべんなく水を湛えるための施設であるということになる。白石は周濠の在り方から、複数の階段状の小濠をもつ「渋谷向山型」、平面的に馬蹄形外郭線をもち、2、3段の水面の異なる濠をもつ「佐紀陵山型」、同一水面で前方後円形の輪郭線をもつ「宝来山型」、同一水面で馬蹄形の外郭線をもつ「ウワナベ型」、水面の異なる4つの濠をもち馬蹄形輪郭線の「西山塚型」、空堀の「市尾墓山型」という6型式に区分した（白石 1983）。佐紀陵山型と西山塚型は、構造的に類似するが時期的に断絶するので異なる類型とされている。白石の分類をふまえて、渡し土手の幅や長さ、高低差を検討した高橋は、前期に渡し土手が多いが、中後期には計画的な設置がみられなくなるという傾向を示した（高橋 2009）。渡し土手に着目し改めて白石分類をみると、渋谷向山型はランダムに設置された複数の渡し土手、佐紀陵山型は左右対称の2つあるいは4つの渡し土手、宝来山型とウワナベ型は渡し土手なし、西山塚型は4つの渡し土手を持つという構造に再区分できよう。

以上を整理すると、墓道および作業道としての役割を強調する考えと、濠に水を溜めるための堰としての役割を強調する考えの二つがあることがわかる。これらは決して相反するものではなく、双方の役割を同時に果たしている場合も十分にある。しかし、渡し土手の設置場所に関しては、二つのうちどちらを優先させていたかでおのずと異なることが予想される。加えて、濠に水を湛えていることが渡し土手の前提となる後者の論には、古墳時代を通じて堰としての役割を果たすのか検討の余地も残されている。そこで本稿では渡し土手を集成し、改めてその役割と機能について考察してみたい。

## 2. 各地域の渡し土手

本稿では、古墳時代の中心地である近畿地域を対象とし、奈良県、大阪府、兵庫県、京都府、滋賀県、和歌山県、三重県の30m以上の古墳における渡し土手の事例を集成した<sup>3)</sup>。この際、発掘調査で古墳築造当時の渡し土手と判明したもののみを対象とした。30m以上の古墳を集成した『畿内

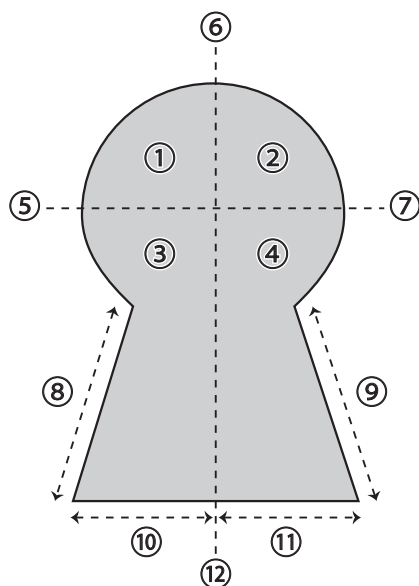
の首長墳』(和田・下垣 2017)によると、奈良県では519の古墳が集成されたが、調査により渡り土手が検出されたのは10古墳である。同様に、大阪府331古墳中7古墳、京都府67古墳中6古墳、滋賀県144古墳中1古墳、兵庫県237古墳中2古墳の事例が確認されており、和歌山県と三重県についても集成を試みたが、現時点では該当する事例はなかった(表1)。発掘調査により判明している渡り土手は、古墳数に対して非常に少なく、検討するにはなお事例の増加が待たれる。しかし、現時点で判明する確実な事例から傾向をとらえ一定の見通しを持つことにより、今後の研究の基礎となることを期待し本稿で考察をおこないたい。なお、時期については、和田・下垣 2017に従った。また、古墳のどの位置に設置されるかについては図1のように区分し、表1、2に記載した。

#### a. 大和(奈良県)の渡り土手(図3～12)

10古墳から16の渡り土手が検出された。弥生時代終末期から古墳時代後期中葉までであるが、中期中葉までの大型古墳の事例が多く判明している。基本的に前方後円墳や帆立貝形前方後円墳に認められたが、方墳の鴨都波1号墳でも検出されている。墳長310mの渋谷向山古墳をはじめ、墳長200m以上の大型の前期古墳で渡り土手の事例が多く把握でき、1古墳に複数の渡り土手が確認された。前方部あるいは後円部のみ渡り土手の確認できる大型古墳もあるが、前方部と後円部の両方が確認されている西殿塚古墳や佐紀石塚山古墳の事例を考慮すると、未検出の前方部あるいは後円部の渡り土手も想定すべきであろう。なお、古墳時代後期中葉の水晶塚古墳にも渡り土手のあることは注意される。全長50mと推定される帆立貝形前方後円墳であるものの、馬蹄形の外堤をもつしっかりと設計で作られている。渡り土手は、横穴式石室と羨道の延長上にあると理解されている。

調査により確認されている渡り土手は、西殿塚古墳を除き、地山削り出しの後に土を盛り成形する丁寧な作りである。茅原大墓古墳では削りだし部分はわずかで、大半が盛土であることが確認された。渡り土手の盛土と前方部の盛土の土層が同一であることから、方墳築造時に渡り土手も形成されたと考えられている。奈良県集成の渡り土手は、上面に礫のないものが大半であるが、渋谷向山古墳の後円部北東渡り土手(図5-3)と佐紀石塚山後円部北渡土手(図8-2)には上面に礫が敷か

[前方後円墳、前方後方墳]



[方墳]

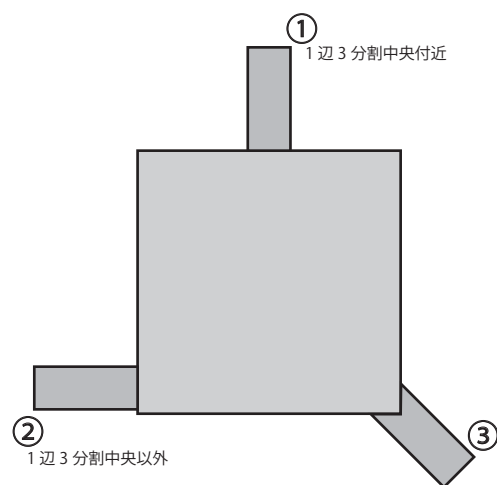


図1 墳丘にとりつく渡り土手の位置

表 1 前方後円墳、帆立形前方後円墳と前方後方墳の渡し土手

所在地	古墳名	所在地	墳形	規模	時期	渡し土手（規模単位はすべてm、括弧内は検出規模）									参考文献
						付設箇所		最大長	上面幅／ 下端幅	高さ	礫		形成方法	出土遺物	
											上面	斜面			
奈良県	箸墓	桜井市	方円	276	弥生末～ 前期初頭	円	②	8.5～	2.0/4.8	約1.3	×	○	削出→盛土	無し	1・2
	西殿塚	天理市	方円	230	前期初頭	円	④	不明	- / 10	1	×	×	削出	埴輪小片	3
						方	⑨	17	- / 7.0	不明	×	×	削出	須恵器片	3
	渋谷向山	天理市	方円	310	前期後葉 後半	円	①	21.28	- / 3.87	不明	○	○	削出	無し	4
						円	②	15.48	- / 3.87	不明	×	○？	削出→盛土	無し	4
	佐紀陵山	奈良市	方円	207	前期後葉	方	⑨	33.64	- / 16.09	不明	×	○	削出→盛土	無し	5・6
						方	⑧	27.79	8.77 / 18.28	不明	×	○？	削出→盛土	無し	5・6
	赤土山	天理市	方円	110	前期末葉	円	②	不明	- / 3.0～4.0	0.3～0.5	×	○	削出→盛土	円筒埴輪列(樹立)	7
	佐紀石塚山	奈良市	方円	218	前期末葉	円	①	4.5	- / 約19.5	不明	○？	×	削出→盛土	円筒埴輪群(樹立)	8
						方	⑫	3.3	- / 約22.5	不明	×	×	削出→盛土	無し	8
茅原大墓	桜井市	帆立	86	中期前葉	方	⑩	7	- / 約7.0	[0.8]	不明	○	削出→盛土	無し	9	
					方	⑪	11	- / 7.5	[0.5]	不明	○	削出→盛土	無し	9	
星塚1号	天理市	帆立	37	後期中葉	円	②	7.3	- / 約2.0	[0.8]	不明	×	不明	埴輪片(上)、 須恵器(斜面)、 木製品(周濠)	10	
水晶塚	大和郡山市	帆立	50	後期中葉	円	④？	10	2.2～2.5/3.6	0.9	×	×	不明	木製品・埴輪 (周濠)	11	
大阪	久米田貝吹山	岸和田市	方円	130	前期後葉 前半	円	⑥？	15？	3？ / -	1？	×	×	削出	無し	12
						円	②？	17？	1.7? / -	1？	×	×	削出	無し	12
	白髪山	羽曳野市	方円	110	後期前葉	方	⑨	不明	不明	不明	×	×	削出	無し	13
	蔵塚	羽曳野市	方円	69	後期後半	円	②	6.2	1.7 / 2.8	0.4	×	×	削出	無し	14
方						⑫	6.2	(3.5) / -	約0.5	×	×	不明	無し	14	
京都	網野銚子山	京丹後市	方円	201	前期後葉 後半～	方	⑩	-	-	-	×	×	削出	無し	15
	今里車塚	長岡京市	方円	74？	前期末葉	円	②	8.8	1～1.5 / 2～2.6	0.3	×	×	削出	無し	16
	久津川車塚	城陽市	方円	183	中期中葉	円	①	16.5	5.5 / 9.0	0.7	○	○	削出	有機質遺物(上)、 水鳥形埴輪(周濠)	17・18
	舞塚	長岡京市	帆立	39	後期前葉	円	③	3.75	(1) / (2)	0.8	×	×	不明	無し	19・20
兵庫	五色塚	神戸市	方円	194	前期後葉 後半	方	⑫	(4.0)	2.5 / 5.2	0.6	×	○	削出？→盛土	埴輪片(盛土中)	21
	池田	朝来市	方円	135	中期前葉	方	⑧	23.5	(3.5) / 約10.4	0.7	○	○	盛土	盾形埴輪片(斜面)	22
						方	⑨	23.2	6.5 / 約10.4	0.58	○	○	盛土	円・朝埴輪(溝)、 円筒埴輪(上)	22
滋賀	姫塚	長浜市	方方	75	前期前半	方	⑧	30	? / 約3.25	不明	×	×	削出	無し	23

表 2 円墳と方墳の渡し土手

所在地	古墳名	所在地	墳形	規模	時期	渡し土手（規模単位はすべてm、括弧内は検出規模）									参考文献
						付設箇所		最大長	上面幅 / 下端幅	高さ	礫		形成方法	出土遺物	
											上面	斜面			
奈良	鴨都波1号	御所市	方墳	20 × 16	前期後葉後半	北東	②	3.2	0.6 / 2.0	不明	×	×	削出→盛土	無し	24
大阪	五手治	羽曳野市	円墳	33	前期前葉後半	南		6.95以上	4.0 / 4.9	0.25 ~ 0.6	×		削出	円筒埴輪(斜面)	25
	向墓山	羽曳野市	方墳	68 × 62	中期中葉	南西	①	12	3.5 / 4.5	0.2	×	×	削出	無し	26
						北	②	-4.5	不明	0.5	×	○	削出	無し	26
	野中	藤井寺市	方墳	37	中期中葉	東	②	(1.5)	1.2 / 2.9	0.5 ~ 0.6	×	×	削出→盛土	無し	27・28
	越中塚	藤井寺市	円墳	39	中期中葉	北		4.1以上	(2.5) / (3)	0.35	×	○	盛土	無し	29
	普賢寺	門真市	円墳	29	後期中葉	北東		3.6	1.2 ~ 2 / 2 ~ 3		×	×	削出	無し	30
						南東		3.2以上	(0.6) / (1.6)	0.4	×	×	削出	円筒埴輪(上=墳丘転落)	30
京都	ヒル塚	八幡市	方墳	50	前期後葉後半	北西	①	17	2.5 / 3 以上	不明	×	×	削出	無し	31
	鳴谷東1号	与謝郡与謝野町	円墳	54	中期中葉	南		3	1.15 / 2.35	約 0.2	×	×	削出	無し	32
	大覚寺1号	京都市	円墳	55	後期後葉	南		10 ?	約 2.7/-	不明	×	×	削出→盛土?	無し	33

方円：前方後円墳、方方：前方後方墳、推定復元（ ）、残存長〔 〕



れていた。また、箸墓古墳の後円部東側（図 3-2）と茅原大墓古墳の前方部 2 つの渡り土手（図 10-2・3）には側面に礫が敷かれていた。なお、茅原大墓古墳については、上面が削平されているので、上面にも礫が敷かれていた可能性が残る。全体としては、後円部にとりつく渡り土手上面に葺石の敷かれる傾向が認められる。

前期古墳の渡り土手の下端幅は、3.0m の幅の狭いものから 22.5m の広いものまでである。その中で、前期初頭の箸墓古墳の渡り土手の幅は 4.8m であり、大規模な古墳の中で極端に狭い。一方、中期中葉の茅原大墓古墳（全長 86m）は、残存幅が 7m と墳丘規模に対し幅が広い。後期の事例は少ないが、全長推定 50m の水晶塚古墳の渡り土手の幅は 3.6m 以下と狭い。渡り土手の高さは、1.3m 以下と総じて低い。

渡り土手に確実に据えられたとされる埴輪が検出されたのは、佐紀石塚山古墳の後円部にとりつく渡り土手（図 8-2）であり、赤土山古墳の渡り土手もその可能性が指摘される。西殿塚古墳では埴輪片や須恵器片が検出されている。箸墓古墳の周濠内に木製馬具が検出されており、築造時の馬具であるならば渡り土手からの転落の可能性も考慮される。また、後期の水晶塚古墳では、転落したとされる木製品や埴輪が多数検出され（図 12-2）、渡り土手に木製祭祀具がたて並べられたと想定されている。

#### b. 河内、和泉、摂津（大阪府）の渡り土手（図 13-20）

7 つの古墳から 11 の渡り土手が確認された。河内で 5 古墳、和泉で 1 古墳、摂津で 1 古墳である。古墳時代前期後葉前半から後期後半のものを含み、墳長 130m の久米田貝吹山古墳が渡り土手を発掘調査で確実に検出した古墳で最大規模の事例である。1 つの古墳に 2 つ以上の渡り土手を持ち、円墳部分にとりつく場合が多い。基本的に地山削り出しによって渡り土手が形成されるが、越中塚古墳では、例外的に滞水状態にあった周濠に盛土しており、墳丘築造後に渡り土手が形成されたと考えられる。

前期後葉の久米田貝吹山古墳には現在多数の渡り土手が存在するが、築造当時の渡り土手と確認されているのはそのうち 2 つである。中期中葉の向墓山古墳の渡り土手は、隣接する墓山古墳の外堤に渡す構造になっており特異である。中期中葉の越中塚古墳の渡り土手は、造出しにとりついており（図 17-1）、渡り土手は儀礼祭祀に用いられたと理解される。渡り土手に礫が敷かれた事例は、向墓山古墳（図 15-2）と越中塚古墳（図 17-2）の 2 例である。向墓山古墳の墓山古墳の外堤にとりつく渡り土手とは別の渡り土手に礫が敷かれていた。

#### c. 山城、丹波、丹後（京都府）の古墳における渡り土手（図 21 ～ 26）

7 つの古墳から渡り土手が各 1 つ確認された。山城で 5 古墳、丹後で 2 古墳で、丹波はなかった。時期は古墳時代前期末葉から後期後葉までであり、確認した渡り土手のある古墳の中では、網野銚子山古墳の墳長 201m が最大規模となり、久津川車塚古墳の墳長 183m、今里車塚古墳の墳長 74m がそれに次ぐ規模となる。前方後円墳や帆形前方後円墳、円墳など円墳原理の墳丘にとりつく渡り土手が多いが、方墳のヒル塚古墳にもみられる。舞塚古墳は不明であるものの、基本的にすべて地山削り出しによって形成される。ただし、大覚寺一号墳の渡り土手は、削り出した後盛土をした可能性がある。

前期後葉後半のヒル塚古墳の渡り土手は、幅 2m 深さ 1m の溝により墳丘と渡り土手を切り離して

いる（図 22）。一見すると第 1 段平坦面から渡り土手へつながり、それを溝が切り離しているように見えるが、渡り土手上面の高さは第 1 段平坦面よりも低くなっており、ほかの渡り土手と同様に 1 段テラス面よりも低いという共通性を指摘できる。

前期末葉の前方後円墳である今里車塚古墳では、円墳第 1 段平坦面に造り出しが形成され、その先に渡り土手がとりついて外部へ延びる構造となっている（図 23-2）。渡り土手が造り出し上面より 40cm 低くなる点は重要である。上面幅は 1 ～ 1.5m（下端幅は 2.0 ～ 2.6m）と狭い。祭祀の場と連続している点で他の事例と異なる。

中期中葉の久津川車塚古墳の渡り土手は、後円部から外堤へと渡す土手で上面と側面に礫が施されている。墳丘付近の渡り土手上面には有機質遺物が置かれ、その上から水鳥形埴輪片が検出された。渡り土手の斜面付近からも鳥形埴輪が出土しており、水鳥形埴輪を配置した可能性が考慮される。渡り土手上面に 2 本の溝も検出された。鳴谷東 1 号墳の渡り土手は、1 号墳中位埴輪列接地平坦面と南側に位置する 3 号墳の墳頂をつなぐ点で、墳丘と外堤をつなぐ他の大多数の渡り土手とは大きく異なる。周辺から土師器の高杯や壺が出土した。

後期後葉の大覚寺 1 号墳は、横穴式石室の羨道の延長上に渡り土手が設置されている。これらの渡り土手は、上面幅は 2.7m と狭く、上面や側面に礫は検出されていない。

#### d. 近江（滋賀県）の渡り土手（図 27）

渡り土手の報告がなされていた古墳時代前期前半の姫塚古墳を補足的に加えたが、発掘調査ではなく測量調査により渡り土手と判断されている点は注意が必要である。前方後方墳にある渡り土手は、今回集成できた中ではこの 1 例のみとなる。

#### e. 摂津、播磨、丹波、但馬（兵庫県）の渡り土手（図 28、29）

2 つの古墳から 3 つの渡り土手が確認された。播磨と但馬からそれぞれ 1 古墳ずつで、丹波と但馬では発掘により判明した渡り土手は確認できなかった。播磨における前期後葉後半の五色塚古墳の渡り土手は前方部主軸から検出され、周濠を掘った後、盛土により形成されている。地山削り出し後盛土か、単純な盛土築造かは判然としない。渡り土手側面には墳丘下段斜面と同様に小礫が葺かれている（図 28-5）。上面には礫は確認されていない。盛土中から埴輪片が出土していることから、渡り土手は墳丘築造後埴輪の樹立をおこなった後につくられたと理解される。そうであるならば、墳丘と一体につくる多くの渡り土手とは、築造工程が大きく異なる事例となる。

また、但馬における中期前葉の池田古墳は、前方部両側に渡り土手が取り付く。周濠底面に近い基盤面の上に、複数の土質の異なる盛土によって成形された。北渡り土手と墳丘との接続部断面の確認から、墳丘側盛土後、渡り土手側盛土をおこない、さらに墳丘側盛土をするという構築手順が確認され、築造当初から渡り土手が墳丘の一部として計画されていたことがわかった。また南北渡り土手ともに、外堤との接続部に溝状の落ち込みが検出され、北渡り土手からは落ち込んだ埴輪片が一定量出土する（図 29-6）。遺物としては、先述の落ち込みから出土した埴輪片の他に、北渡り土手斜面から個体判別の可能な円筒埴輪片がまとまって出土しており、上面に埴輪が樹立していた可能性がある。南渡り土手からは前方部接続部付近に盾形埴輪片が出土している。これは前方部頂からの転落と考えられる。

### 3. 近畿地域における渡り土手の特徴と接続部からみた機能

#### (1) 近畿地域における渡り土手の特徴

以上、近畿地域の発掘調査により確認された渡り土手の様相から、次のような特徴が見いだせる。まず、大型前方後円墳の出現を箸墓古墳に求めるならば、その出現段階から渡り土手が構築されていることを確認した。弥生時代終末期の奈良県瀬田遺跡の円形周溝墓では、裾広がりの陸橋が見つかった。従来指摘されるように、陸橋が前方部へ発達したならば、渡り土手は弥生墳丘墓の陸橋の外部へのアクセスの役割を引き継いだ可能性が高い。また、葺石の出現とほぼ同時に渡り土手に礫が敷かれるようになり、墳丘施設の変化と渡り土手の礫敷きの始まりは連動していると理解された。

墳丘の段築が明確になると、一部に例外があるものの、基本的には下段斜面に渡り土手の取りつくことがわかった。造り出しが1段目平坦面に連続する高さで構築されることを考慮すると、渡り土手は祭祀儀礼をとりおこなう場よりも低い位置に築造されるのが基本だと理解される。また、渡り土手の築造方法と墳丘の築造方法を比較すると、墳丘下段が地山削り出しの場合には、若干の盛土をして丁寧につくる事例もあるが、基本的には渡り土手も地山削り出しである。一方、奈良県茅原大墓古墳や兵庫県池田古墳のように墳丘下段が盛土成形の場合には、渡り土手も盛土によりつくられていることがわかった。このことから、渡り土手は墳丘と同時に築造されており、墳丘設計段階で渡り土手も設計されている可能性が高い。ただし、兵庫県五色塚古墳の前方部主軸上にとりつく渡り土手と大阪府越中塚古墳の造り出し中央にとりつく渡り土手の2例は、墳丘築造後に成形されている点に注意される。

これらを整理すると、古墳の渡り土手は弥生墳丘墓からの発展の可能性が高く、元来の機能は墓道であると想定できる。墳丘構築と同時に渡り土手が成形される点、墳丘の葺石の出現とともに渡り土手の礫敷きが見られる点はこれと矛盾しない。では、古墳の渡り土手はすべて墓道といえるのであろうか。そこで、どのように用いられたかを知るため、まず土手を渡している場所に着目して分類し、機能の特定を試みたい。

#### (2) 渡り土手の接続部からみた分類

渡り土手の接続部に着目すると、次のように分類できる。まず、墳丘と濠の外部や外堤とをつなぐA類、渡り土手が横穴式石室と羨道の延長上にあり、墳丘と外部をつなぐB類、墳丘と他の古墳の施設をつなぐC類の3つに分けられる。さらにA類は、造り出しに連続しないa類と造り出しに連続するb類に分けられる。

この中では、Aa類が最も多い。Ab類には京都府今里車塚古墳（前期末葉）、大阪府越中塚古墳（中期中葉）、B類には京都府大覚寺古墳（後期後葉）や奈良県水晶塚古墳（後期中葉）、C類には京都府鳴谷東1号墳（中期中葉）、大阪府向墓山古墳（中期中葉）がある。A類は、前期から後期まで通時的に存在し、B類は横穴式石室の盛行する後期に、C類は陪塚の盛行する中期にみられ、B類とC類には時期的な偏りが認められる。次にA～C類の渡り土手がどのような機能を持っているかを考えてみたい。

#### (3) 接続部からみた渡り土手の機能

まず、Ab類は造り出しと連続することから、儀礼祭祀に用いられた道と理解するのが自然である



う。

B 類の渡し土手は、被葬者の埋葬される横穴式石室に連続することから、墓道として機能したと想定される。水晶塚古墳の周濠からは木製品が多数出土しており、特に渡し土手の両側面付近から出土した、2つの鳥形木製品は注目される。渡し土手の両側に木製品がたて並べられた様相が復元されており、墓道との理解に矛盾しない。一方で、これらの古墳の築造作業で最も労力がかかるのは横穴式石室の構築であろう。その際には、羨道からすぐに渡れる B 類の渡し土手が、最も効率よく石室構築の石を運ぶ道となったであろう。したがって B 類は、墓道兼作業道として用いられた可能性が高い。

C 類の鳴谷東 1 号墳は、円筒埴輪列のある平坦面から他の墳丘の主体部へと渡す土手である（図 24-1）。円筒埴輪列は渡し土手のとりつく部分で途切れ、途切れた両側の埴輪列上に木柱があった（図 24-2）と想定されるので、渡し土手のとりつく部分は入り口を意識したつくりになっていたと理解される。下段斜面にとりつく多くの渡し土手とは異なり、渡し土手のとりつく位置は墳丘の高い部分であり、見せることを意識したと推定できる。向墓山古墳の渡し土手も他の古墳の外堤とつなぐ構造（図 15-1・3）であるため、単なる作業道ではないだろう。C 類は、2つの古墳の被葬者が関連することを強調しつつ葬送儀礼をおこなう舞台装置となった可能性が考慮される。

一方、多くの事例のある Aa 類は、墓道のみ、墓道兼作業道、作業道のみ、堰という機能が想定される。堰という機能については、水濠との関わりを考慮する必要があるため後述することとし、ここではまず前 3 者の機能について検討する。兵庫県五色塚古墳と大阪府越中塚古墳については、墳丘築造後に渡し土手が構築されたため、墳丘築造のために使用された作業道とは考えられない。それ以外の、墳丘と同時に成形された渡し土手はどうであろうか。その機能を特定するため、渡し土手に付随する要素である礫敷きの有無に着目したい。

渡し土手の側面あるいは上面に礫を施す古墳は、前期では奈良県箸墓古墳、同県渋谷向山古墳、同県佐紀陵山古墳、同県佐紀石塚山古墳、同県赤土山古墳、兵庫県五色塚古墳、中期では奈良県茅原大墓古墳、兵庫県池田古墳、京都府久津川車塚古墳、大阪府向墓山古墳、同府越中塚古墳である。現時点で集成した事例では、古墳時代前期初頭からはじまり中期中葉までにおさまる。その中で、埴輪が渡し土手上面あるいは斜面に据えられていた可能性があるのは、佐紀陵山古墳、佐紀石塚山古墳、赤土山古墳、池田古墳、久津川車塚古墳である。礫敷きのない渡し土手に埴輪の据えられていた確実な事例は今のところなく、礫敷きされた渡し土手において埴輪が用いられていたことがわかる。渡し土手が作業道のみ用いられるならば、見栄え良く礫を敷く必要はない。佐紀陵山古墳の渡し土手の外堤付近に置かれた盾形埴輪が、渡し土手から外堤への行き来を遮断するようにおかれた事例を考慮すると<sup>4)</sup>（清野 2018）、外界と墳丘内部を切り離す、あるいは盾により内部へ邪気を入れないように守護するというような意図が読み取れる。池田古墳の渡し土手でも外堤付近に土手上の往来を遮断する方向に溝が掘られ、ここから埴輪がまとまって検出された。このような事例をふまえると、礫敷きのある渡し土手は、内部と外界の通路としての意味を含んでいたことが想定され、単に作業道のみではなく、祭祀儀礼においても用いられたと考えるのが自然であろう。さらに、久津川車塚古墳の渡し土手を発掘調査した結果、興味深いことが判明した。削り出して墳丘と渡し土手を成形した後、墳丘に葺石を置き、次いで渡し土手側面に礫を葺くという順序がわかったのである（小泉他 2018）。したがって、渡し土手の使用方法を復元すると、まず礫のない状態で墳丘に石や埴輪を運び、作業道として使用した後、礫を葺いて見栄え良く渡し土手を仕上げたことになる。礫



を側面に葺いたり上面に敷いた渡り土手を通して儀礼が行われ、あるいは被葬者が運ばれたであろう。礫は最初から施されたのではなく、作業道として使用された後、礫を施したと理解される。

それでは、礫の用いられない渡り土手はすべて作業用であろうか。礫敷きのない渡り土手をもつ前期前葉の大阪府五手治古墳には、外部に接続する付近の渡り土手上面に、3本の木柱が直行する方向に並べられていた(図13-2)。渡り土手を遮断する方向に立てられている点で、前述の埴輪と同様の意味が想定され、この渡り土手も祭祀儀礼にともなう道として用いられたと推測される。なお、五手治古墳の渡り土手の埴丘側付近には埴輪棺が埋納されていたが(図13-3)、鰭付き円筒埴輪であることから埴輪棺の時期は前期後半と理解でき、前期前葉の古墳築造にともなうものではない。

また、前期後葉の京都府ヒル塚古墳の渡り土手は、埴丘付近で渡り土手直行方向に溝が切られている(図22)。これも埴丘内部と外界をつなぐ道を遮断する意味が想定されるならば、礫を敷かない渡り土手であるが墓道として利用された事例ととらえられよう。

ところで、渡り土手直行方向には、前述の通り埴輪だけでなく木柱や溝の施される事例もあった。これらの事例のある時期は、主に前期前葉から中期中葉であり、造り出しの定着する時期と重なりを見せる。渡り土手を作業道として使用した後に、埴丘から完全に切り離した場合、埴丘側の空間を祭祀空間として利用することも可能である。Ab類のように渡り土手と造り出しが一体となっている事例のあることをも考慮すると、渡り土手出入口付近の儀礼の場が埴丘側に取り込まれ固定化した施設が造り出しであるとした和田晴吾の理解を追認できる。

以上から、Aa類の中でも側面や上面に礫を敷いている渡り土手や、埴輪や木柱を据え、溝を施す渡り土手は、墓道や葬送儀礼の道としての役割を担ったと確定される。同一古墳のそれ以外の渡り土手は、作業道として用いられたであろう。前期後半から中期になると奈良県渋谷向山古墳や同県佐紀陵山古墳、同県茅原大墓古墳、京都府久津川車塚古墳、兵庫県池田古墳のように礫敷きの渡り土手を2つもつ古墳が出現し、複数の道が墓道や儀礼祭祀に用いられるようになったと理解される。なお、後期になると礫敷きの渡り土手はみられなくなるが、1古墳に1つは埋葬者を運ぶ道として渡り土手が用いられたであろうから、礫なしの渡り土手が墓道として使用されたと想定される。

ここまですら整理すると、古墳の渡り土手は、初期においては墓道兼作業道として始まり、その後、墓道兼作業道の他、作業道と墓道に機能分化していくことがわかった。前期後半になると、礫を敷いた渡り土手付近に埴輪や木製品を置き、祭祀儀礼をとりおこなう道として、渡り土手を荘厳に見せるようになる。前方後円墳の前方部に2つの渡り土手を設置されるようになるのも前期後半以降である。

#### 4. 渡り土手の幅および堰としての機能

次に、渡り土手の幅と水濠について検討してみよう。渡り土手の幅は機能だけでなく、埴丘規模に表される被葬者のランクとも関連することが予想される。また、周濠の水の有無は渡り土手の堰としての機能と深く関わると考えられるからである。

##### (1) 古墳の埴丘規模と渡り土手の幅との関係

渡り土手は作業する場合にも祭祀儀礼や墓道として利用する場合にも、人の往来が想定される。作

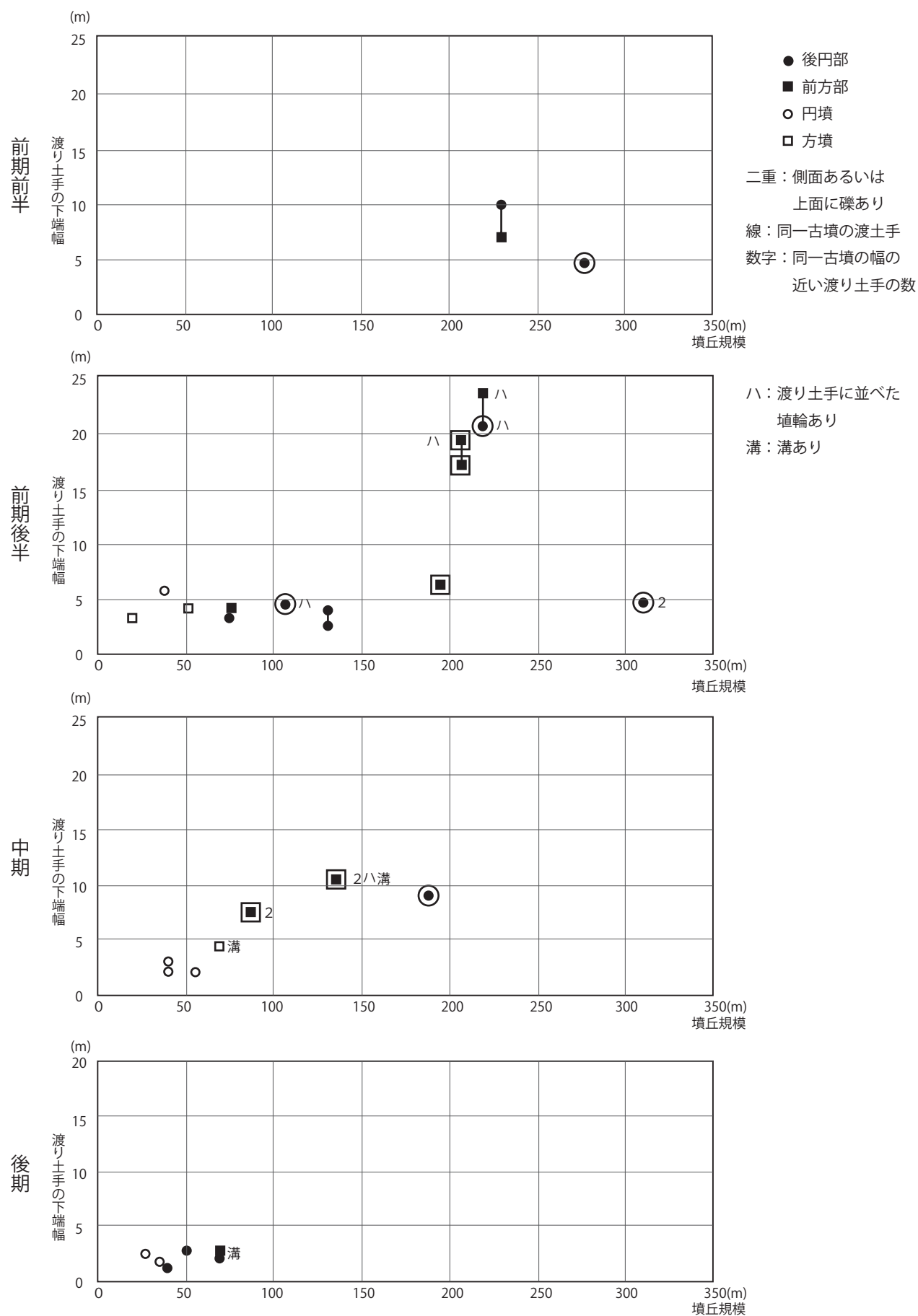


図2 渡り土手の下端幅と古墳規模における時期的変遷

業する場合にはすれ違う幅があれば作業効率が良くなったはずである。墓道として使用される場合には、渡り土手の幅が広ければ列をなして渡ることができ、儀礼の一場面として葬送儀礼を盛大に見せる重要な舞台装置となったであろう。葬送儀礼の盛大さは地位の高さとも関連したに違いない。そこで、古墳の規模と渡り土手の幅の関係を示したのが図2である。渡り土手の幅は、削平されずに残存する場合の多い下端の幅で検討した。また、出現期の様相を把握するため、前期前半と前期後半に分け、さらに中期、後期へと変化をおった。

古墳時代前期前半においては、箸墓古墳の渡り土手では4.8mであったが、西殿塚古墳になると10mと幅が急激に広がる。前期後半になると、200m以上の墳長をもつ佐紀陵山古墳と佐紀石塚山古墳で15m以上の幅広い渡り土手が出現する。一方、墳長310mの渋谷向井山古墳では3.87m幅、墳丘194mの五色塚古墳で5.2mと幅の狭い渡り土手が採用され、大規模な前方後円墳の渡り土手は幅の広いものと狭いものに二分される。幅の広い佐紀陵山古墳では、前方部に左右対称の幅広い渡り土手を築造する。130m以下の規模の古墳では、5m以下と幅が狭い。一つの古墳の中で幅の極端に狭いものと広いものが組み合う事例は今のところ見られない。

中期になると、墳長86m規模の茅原大墓古墳でも約7m幅の渡り土手を前方部にとりつけ、墳丘規模に対して前期よりもかなり幅の広い渡り土手が採用されるようになる。さらに墳長135mの池田古墳は10.4mと幅の広い渡り土手を前方部の左右に取り付ける。これらは、幅広い点と前方部に左右対称に渡り土手を取り付ける点で、前期後葉の佐紀陵山古墳の事例と類似している。円墳や方墳の事例も加えると、大規模な古墳は幅の広い渡り土手を、小規模な古墳は狭い渡り土手を採用したことがわかり、墳丘規模と渡り土手の幅が相関する。

集成した渡り土手のある後期古墳は70m以下の墳丘のみであるが、後期になると渡り土手幅は3.6m以下と非常に幅の狭いものへと変化する。中期前葉の奈良県茅原大墓古墳（前方後円墳）の墳長が86mで渡り土手の下端幅7.0mおよび7.5m、中期中葉の大阪府向墓山古墳（方墳）が一辺68mで渡り土手幅4.5mであるのに対し、後期後半の大阪府蔵塚古墳（前方後円墳）は69mの墳長で下端幅2.8mの渡り土手が後円部にとりつくことから、墳丘規模に対する渡り土手の幅は、後期になると狭くなる傾向が認められる。加えて、礫敷きは中期中葉まで認められるが、今のところ後期の事例はない。したがって、幅を広くし礫を敷くなどして壮麗に見せる舞台としての渡り土手は後期以降に衰退していくのであろう。

## (2) 周濠の水と渡り土手の機能

これまでの研究を踏まえると、渡り土手の位置の決定は水濠かどうかとも密接に関わることが予想される。周濠に水を湛えるという発想は、弥生墳丘墓ではなく、古墳時代に始まったものである。

周濠の堰としての渡り土手の機能は、水濠でこそ発揮されるが、どの古墳にどの程度水を湛えていたかは、現地での土層の検討成果などの証拠を必要とするため、本論では論じえない。実際に周濠に水はなくとも水を想定した祭祀はありえるし、逆に水の祭祀とは関係なく湧水点に達した周濠に水が溜まることもあるだろう。水成堆積層などから実際に濠に水を湛えていた可能性が高いと考えられている古墳は少なくなく、その場合には思想的な背景があったとの理解が自然であろう。

発掘調査により、木樋のある導水施設の敷設される祭祀の場は、古墳時代前期の奈良県纏向遺跡をはじめ京都府浅後谷南遺跡や滋賀県服部遺跡、中期の奈良県南郷大東遺跡など、近畿地域の遺跡で多く認められ（青柳2003）、福岡県延永ヤヨミ園でも確認された（城門編2015）。これを模倣した導

水施設を伴う圀形埴輪が古墳へ導入されるようになるのは、中期前葉からである。周濠付近に配された水鳥形埴輪も周濠の水を表現するものであるが、中期前葉の大阪府津堂城山古墳の水鳥形埴輪が最古の例として知られている（加来 2002）。水鳥形埴輪は、古墳の規模に関わらず九州から東北まで広い地域で用いられ、検出状況が判明しているものは造り出し周辺が多いとされる。それに対し、船形埴輪は前期後葉が初現とされ、奈良県や大阪府を中心に主に近畿地域に分布し、中小型の円墳や方墳に多いという傾向を示す（高槻市立今城塚古代歴史館 2014）。文様の刻まれた船材が周濠から検出された奈良県巢山古墳は中期前葉である。こうした水鳥形埴輪と船形埴輪、圀形埴輪、船材などの出現時期から、周濠に水をたたえる思想は、少なくとも古墳時代前期後葉から中期前葉に定着したと理解される。

和田はこれらの埴輪や船材の出土状況を組み合わせて検討し、船形埴輪は他界へ入る船、圀形埴輪は禊を表現し、船からおり禊をした死者を武器や武具で守られた居館のある墳頂へさらに導くという葬送儀礼を想定した（和田 2015）。そして、この古墳の様式の完成は、古墳時代前期後葉から中期前葉頃とした。弥生時代早前期の福岡県江辻遺跡の舳先と櫓と艫をもつ船形木棺遺構や、弥生時代中期後半の名古屋市平手町遺跡方形周溝墓出土の船形木棺を、船に関わる葬送の初現とらえる見方もある（辰巳 2015）が、非常に稀な事例であり古墳時代までの時間的断絶も大きく、これが古墳時代につながったとは考えにくい<sup>5)</sup>。検討はこれからとしつつ、さらに、和田は、古墳時代にみられる魂の移動をとまなう思想は、中国の室の中に邸宅をつくる思想に影響されているという可能性を示唆した（和田 2015）。家形埴輪や武器、武具をはじめとした埴輪による居宅の表現についてはその理解が直接あてはまるが、船で水を渡るという部分まで中国からの影響で理解できるかは今後検討する必要がある<sup>6)</sup>。少なくとも、墓の周囲に水をたたえるという直接的な表現は同時期の中国や朝鮮半島の墓には一般的ではない<sup>7)</sup>。墳丘周囲に水を実際に湛えるというのは、弥生墳丘墓や方形周溝墓など弥生時代の墓にはみられないので、日本列島の古墳に起源がある可能性が高い。

ただし、実際に濠に水を張ろうとすると墳丘築造のために水平な面を確保する必要が生じ、古墳設計に大きく影響したことが十分に予想される。古墳の規模が大きくなるほど、周濠までを想定した広大な平坦地を見つけるのに困難を伴う。平坦な面に古墳を築造するのが第1であるが、それでもなお残る起伏を克服するには、従来述べられてきたように、渡し土手を堰として利用するのが効果的であっただろう。前方部と後円部に高低差のある場合は、くびれ部付近に渡し土手を多く設定するのが有効であっただろうし、前方後円墳の左右に高低差がある場合には、主軸付近に渡し土手を設定するのが有効であっただろう。ただし、これは川からいったん水を引いたのちせき止めた場合や、湧水を利用する場合など滞水を想定している。渡し土手を作業道や墓として使用した後に、川から水を引き恒常的に流す場合には、水面は渡し土手より高くなければならない。その場合、礫敷きは少しの防止効果はあろうが、結果的に渡し土手は容易に破損され、残存状況は極めて悪いものになるだろう。仮に渡し土手が破損して削れると墳丘側の渡し土手がとりつく部分に葺石のないところできてしまい、水面に隠れる部分が多いとはいえず見栄えが悪い。濠に水をたたえる場合には、恒常的に水を流すよりも滞水した状態の方が想定しやすい。



## 5. 渡り土手の変遷と画期

近畿地域の渡り土手について、接続部によって分類し、渡り土手に敷設される礫敷きや溝、埴輪配置、さらに水濠に関わる埴輪などから検討をおこない機能を特定した。以上を、時間的に整理すると次のようになる。

渡り土手は基本的に一貫して墳丘と一体で成形され、墳丘の葺石出現とともに渡り土手には礫敷きがみられる。前方後円墳にとりつく渡り土手は、弥生墳丘墓からの発展と理解できることから、墓道としての機能が本来備わっていたと理解される。これは作業道としての役割も兼ねていたであろう。前方後円墳に渡り土手 Aa 類のとりつく古墳時代前期初頭を第 1 の画期とする。第 1 の画期では、渡り土手は弥生墳丘墓以来の墓道兼作業道という機能に加え、作業道のみの機能を有する渡り土手も設置されるようになった可能性が考慮される<sup>8)</sup>。

前期前葉以降 Aa 類の渡り土手では、人が渡るのに必要な幅以上に広い事例が出現しはじめ、中期前葉になると墳丘規模に対して渡り土手の幅が相関するようになる。幅の広い渡り土手が最も盛行する前期後葉から中期前葉に、渡り土手に礫を敷き、埴輪を立てるなど墓道が壮麗に飾られ、外界と墳丘内部を断ち切るように溝が切られ、埴輪や木柱が置かれるなどの祭祀行為も盛んになる。周濠に水をたたえる思想を反映するようになるのも前期後葉から中期前葉である。また、墳丘から他の古墳施設へ渡す土手 C 類や、造り出しに連続する渡り土手 Ab 類が前期末にみられ、墓道のみの機能をもつ渡り土手が認められる。墓道兼作業道あるいは作業道のみというそれまでの機能に、墓道のみ、水をためる際の堰という機能が新たに加わる古墳時代前期後葉から中期前葉を、第 2 の画期とする。

後期になると、作業道兼渡り土手の機能をもつと想定される、横穴式石室へ直結する渡り土手 B 類が認められる。渡り土手 Aa 類では、埴輪がおかれ礫の敷かれた幅広い墓道がみられなくなる。ただし、水晶塚古墳のように渡り土手の左右から鳥形木製品が出土するなど、墓道に沿って左右両側に儀礼用木製品をたて並べる行為は、後期にも継続する。

6 世紀後葉の福岡県仙道古墳のように新しい時期まで残る柵形埴輪はあるものの、囲形埴輪は中期末までとされ（青柳 2010）、木樋形土製品の出土する古墳は中期におさまる。後期に確認される船形埴輪は神奈川県瀬戸ヶ谷古墳、茨城県舟塚古墳など中部、関東地域の古墳であり、近畿地域にはみられない（高槻市今城塚古代歴史館 2014）。古墳時代後期前葉の今城塚古墳は水濠の可能性が考慮され、水鳥形埴輪は後期になっても継続してみられるものの、近畿地域においては水を象徴する形象埴輪はその後衰退し、濠に水を張る事例は減少する。

渡り土手の幅が狭くなり、礫敷きや埴輪を立てるなどの事例がみられなくなる後期を、第 3 の画期とする。第 3 の画期以降、近畿地域では渡り土手の堰としての機能は弱まり、墓道と作業道を兼ねる渡り土手が増加したと考えられる。

## おわりに

近畿地域の渡り土手は、古墳時代初頭の箸墓古墳から認められ、古墳時代後期まで継続する。北限は福島県杵ヶ森古墳、南限は宮崎県女狭穂塚（宮崎県教育委員会 2012）と広い範囲で古墳にともな

い築造される渡り土手は、目立たないが必要不可欠な古墳の施設であっただろう。後円部主軸上に木製の橋を渡した事例が大阪府ニサンザイ古墳（内本編 2018）や同府蔵塚古墳（江浦 1998）で確認されるなど、土橋のみでは論じきれない部分もある。しかし、数少ないとはいえ事例の蓄積しつつある渡り土手について、古墳の中心地である近畿地域で傾向をつかめば、各地の渡り土手との比較や土橋以外の施設との関係も検討が可能になるとの見通しから、本稿では近畿地域の渡り土手を集成し検討をおこなった。これまで渡り土手は、墓道や作業道としての役割があるとの理解と、水濠の堰としての役割を想定する考えがあり、それぞれ別個に論じられてきた。本稿では、渡り土手の接続部、礫や溝、埴輪などの付随施設や、渡り土手の幅、濠に水をたたえる思想の定着などから多角的に検討し、墓道・作業道と堰の双方を勘案して渡り土手の機能の時期的変遷を考察した。その結果、渡り土手には3つの画期が設定でき、作業道と兼用した墓道としての役割が本来的なものであるが、墓道のみとしての使用や堰としての機能を新たに加え、さらに再び墓道兼作業道の重視へと時期的に変化することを明らかにした。今後の渡り土手の事例の増加に期待し、本稿を終えたい。

謝辞 本稿の集成は、奈良県、滋賀県を山崎、大阪府を山崎・前田、京都府、和歌山県、三重県を前田、兵庫県を園原が担当し、図版は園原が作成した。執筆者全員で検討を重ね、本文は長友が執筆した。本稿は久津川車塚古墳の発掘調査で渡り土手を検出したことが発端となった。久津川車塚古墳研究会では、有益なご助言をいただき、資料集成においては上野あさひさんにご協力いただいた。心より感謝申し上げます。

奈良県

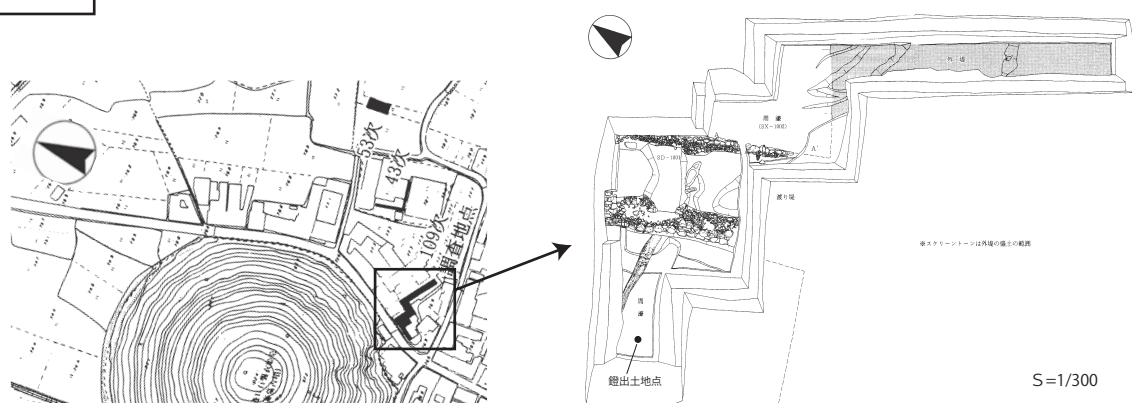


図3-2 渡り土手検出遺構図

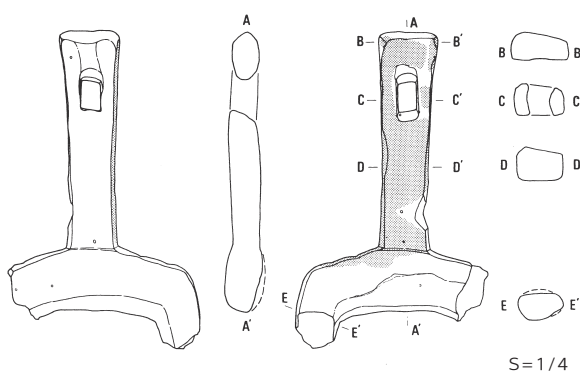


図3-3 渡り土手付近周濠出土の木製輪鐙

図3-1 墳丘図

## 図3 奈良県 箸墓古墳



図4-1 墳丘図

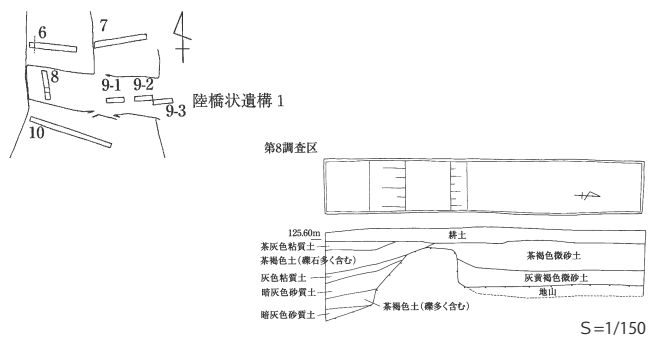


図4-2 第8調査区平・断面図

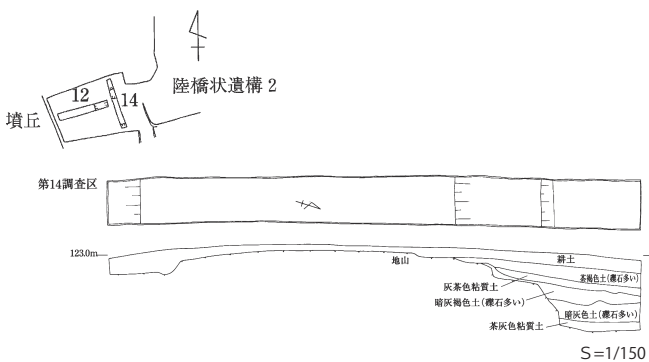


図4-3 第14調査区平・断面図

## 図4 奈良県 西殿塚古墳



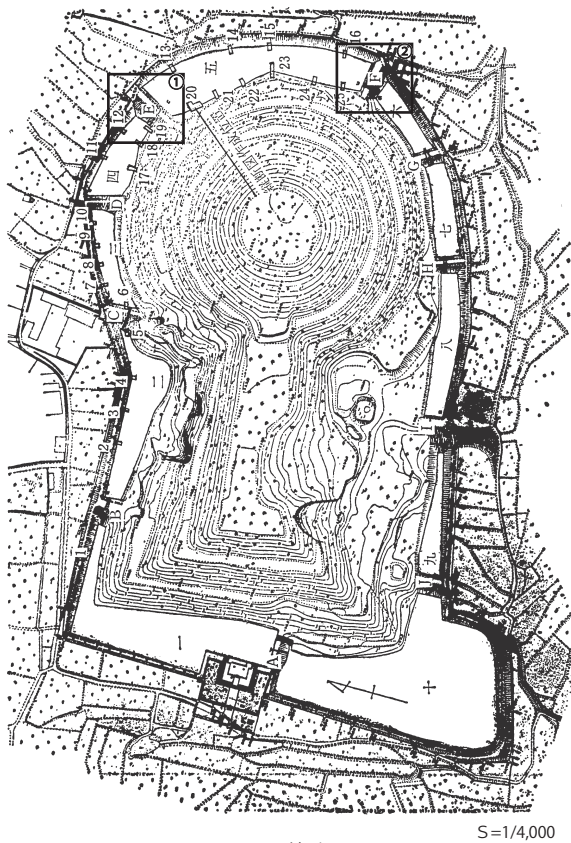


図5-1 墳丘図

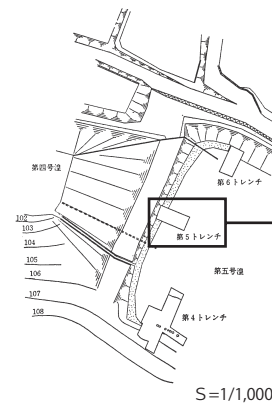


図5-2 渡り土手検出遺構図①

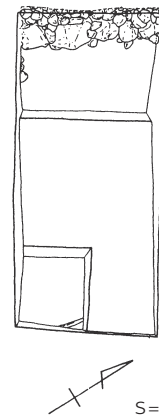


図5-3 第五トレンチ平面図

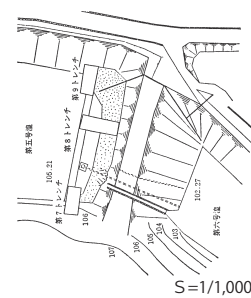


図5-4 渡り土手検出遺構図②

## 図5 奈良県 渋谷向山古墳

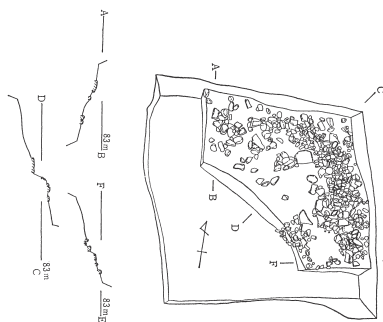
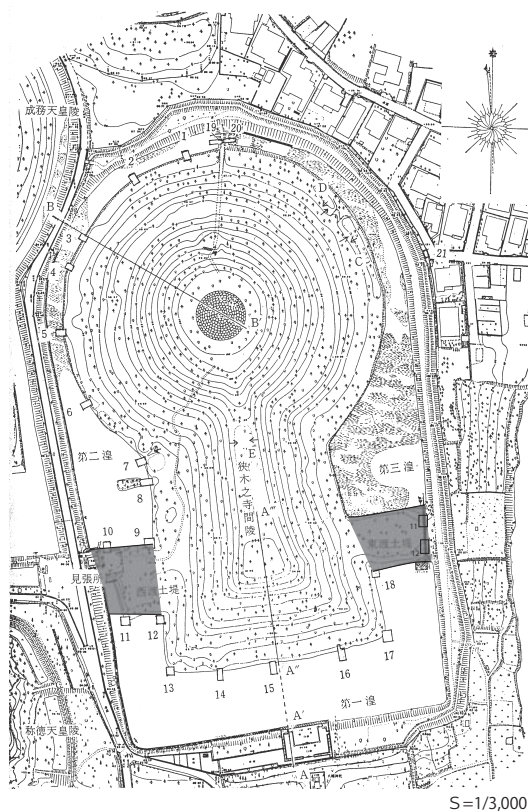
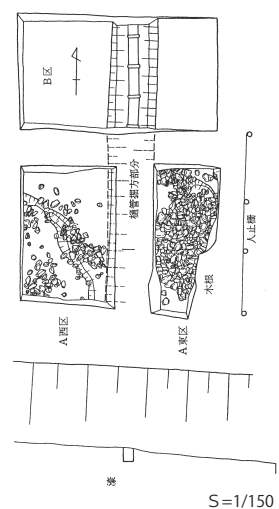
図6-2 渡り土手(西)  
9トレンチ図6-3 渡り土手(西)  
12トレンチ

図6-1 墳丘図

図6-4 渡り土手(東)  
12トレンチ

## 図6 奈良県 佐紀陵山古墳



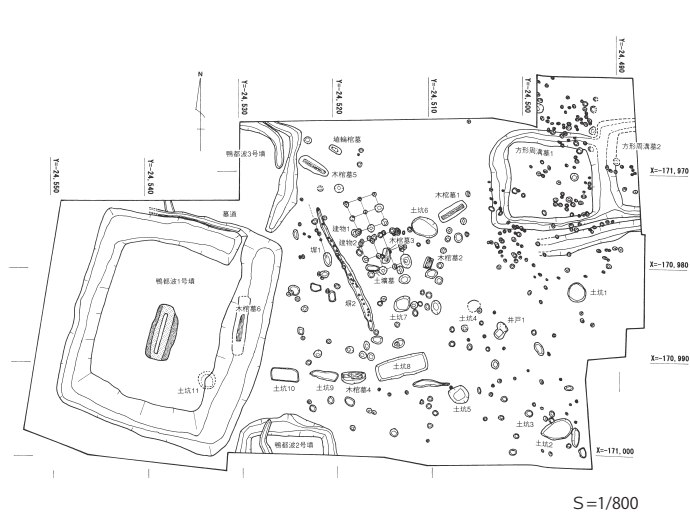


図 7-1 遺跡平面図

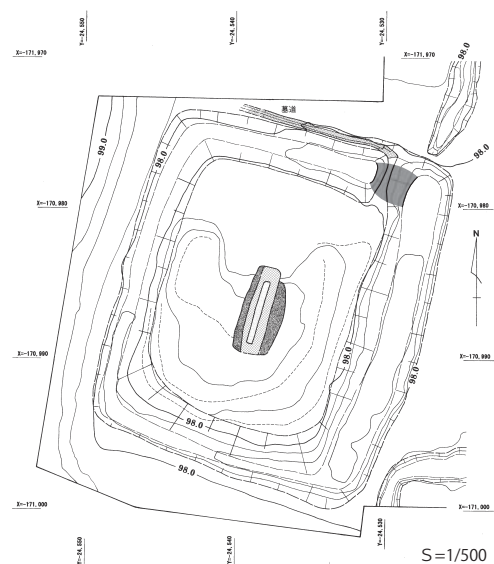


図 7-2 墳丘図

図 7 奈良県 鴨都波 1 号墳

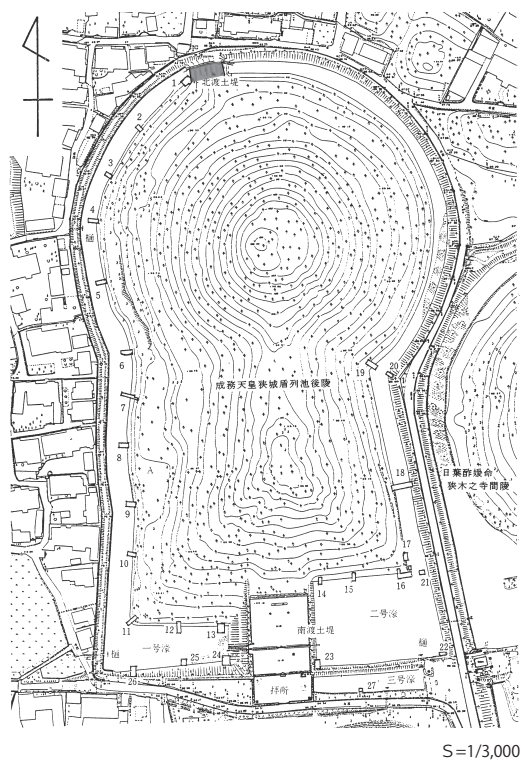


図 8-1 墳丘図

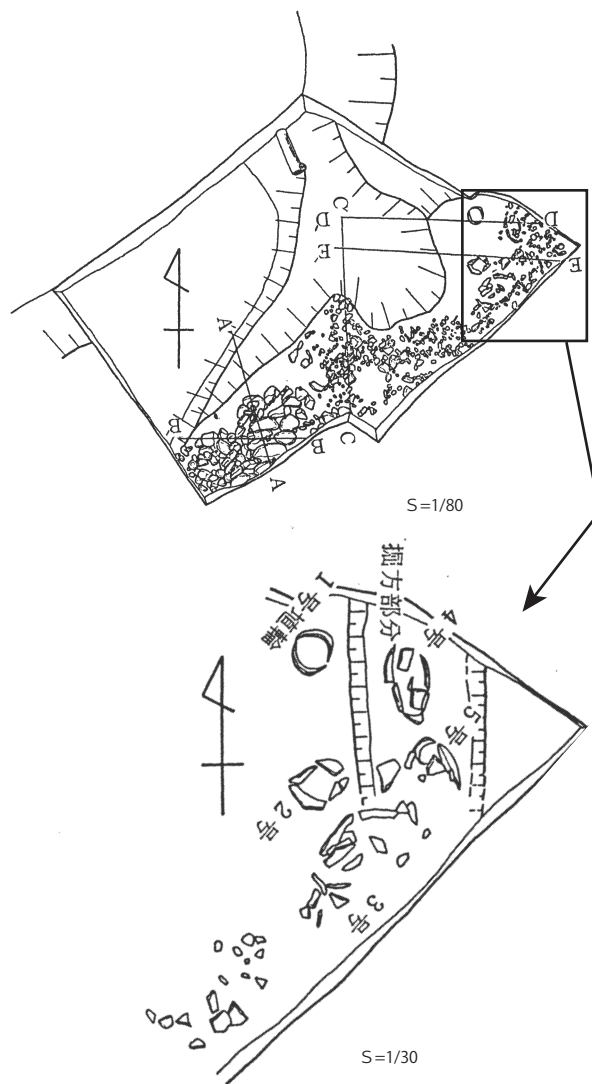
図 8-2 渡り土手 (北)  
1 トレンチ

図 8 奈良県 佐紀石塚山古墳



図9-1 墳丘図

S=1/1,500

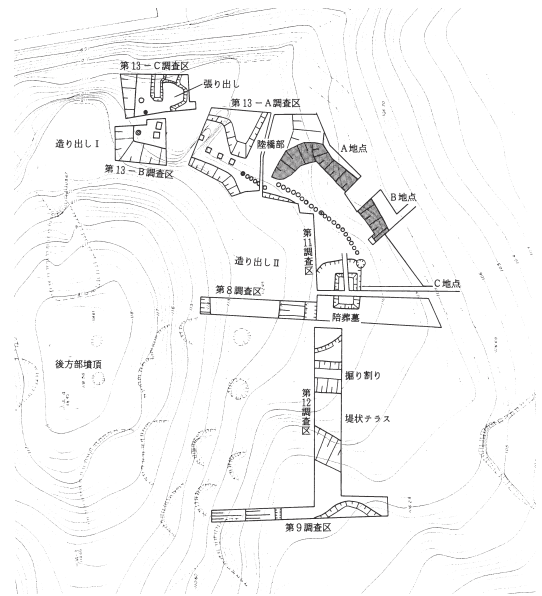


図9-2 渡し土手検出遺構図

S=1/800

## 図9 奈良県 赤土山古墳

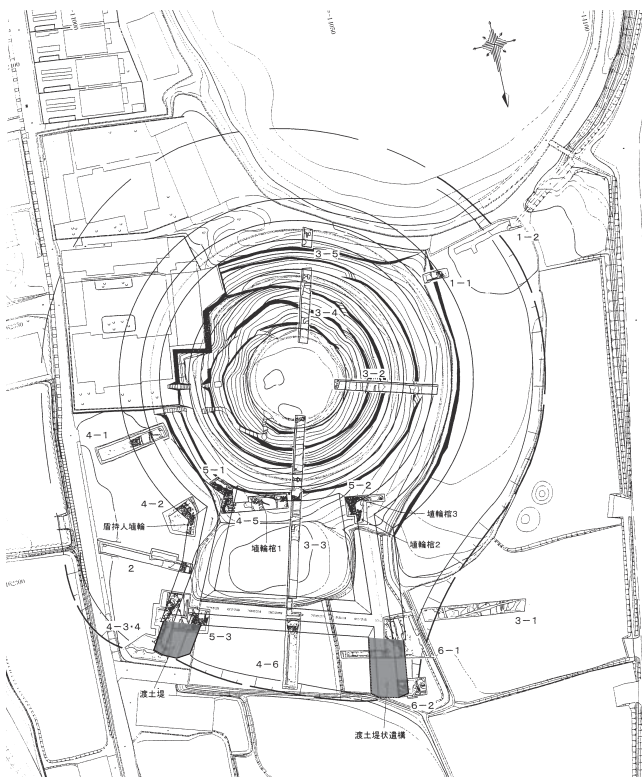


図10-1 墳丘図

S=1/1,500

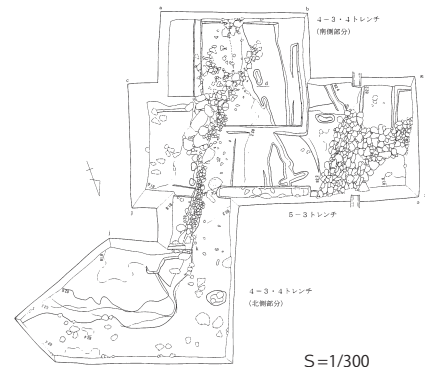


図10-2 渡し土手検出遺構図

S=1/300

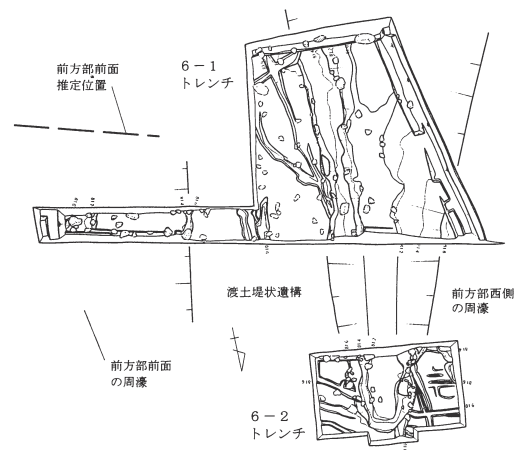


図10-3 渡し土手状遺構検出遺構図

S=1/300

## 図10 奈良県 茅原大墓古墳

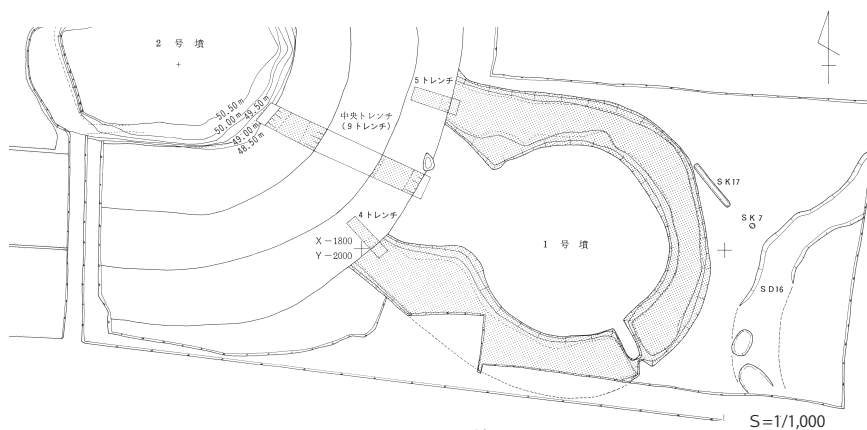


図 11-1 墳丘図

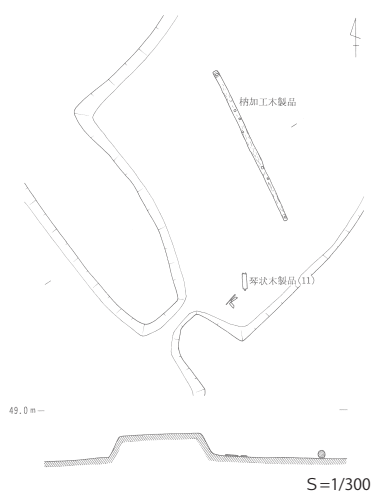


図 11-2 渡り土手検出遺構図

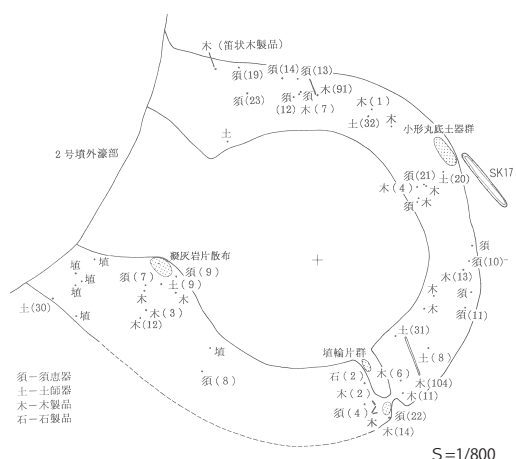


図 11-3 遺物出土位置図

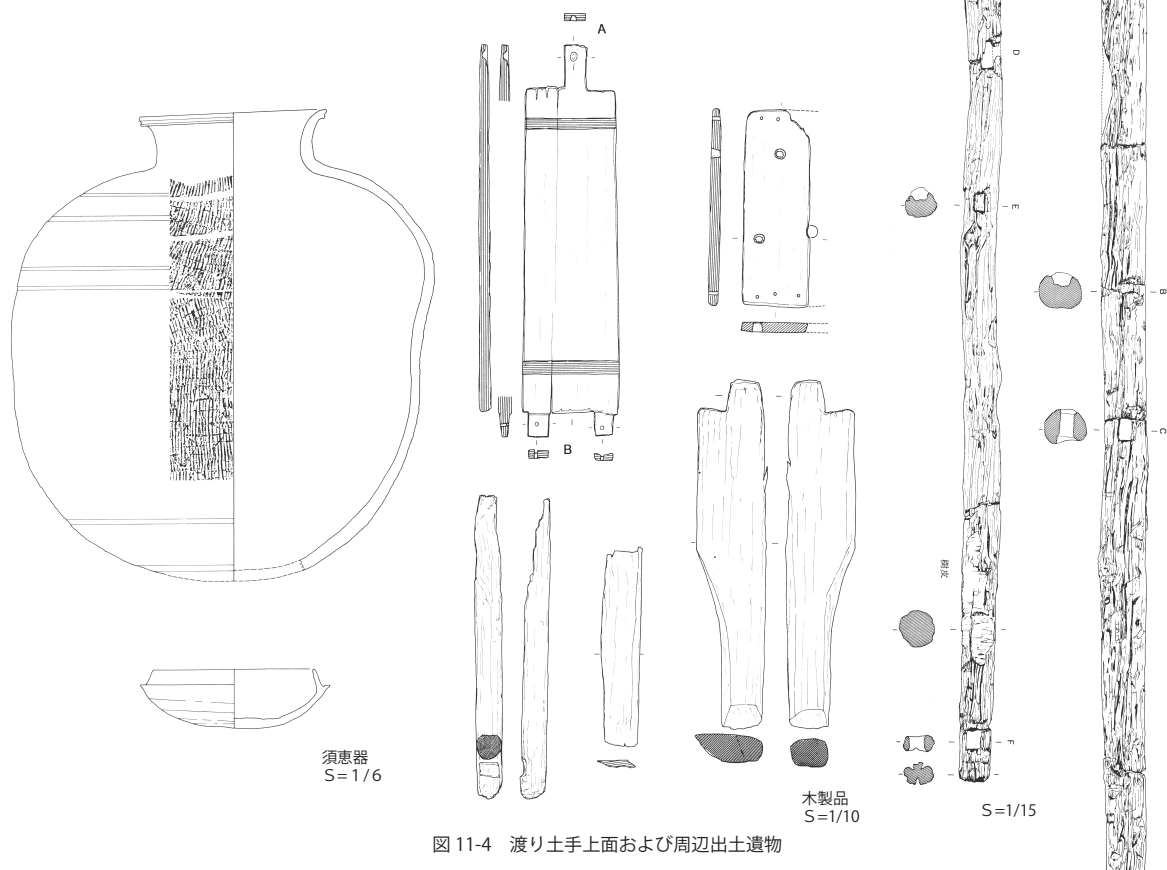


図 11-4 渡り土手上面および周辺出土遺物

図 11 奈良県 星塚 1 号墳



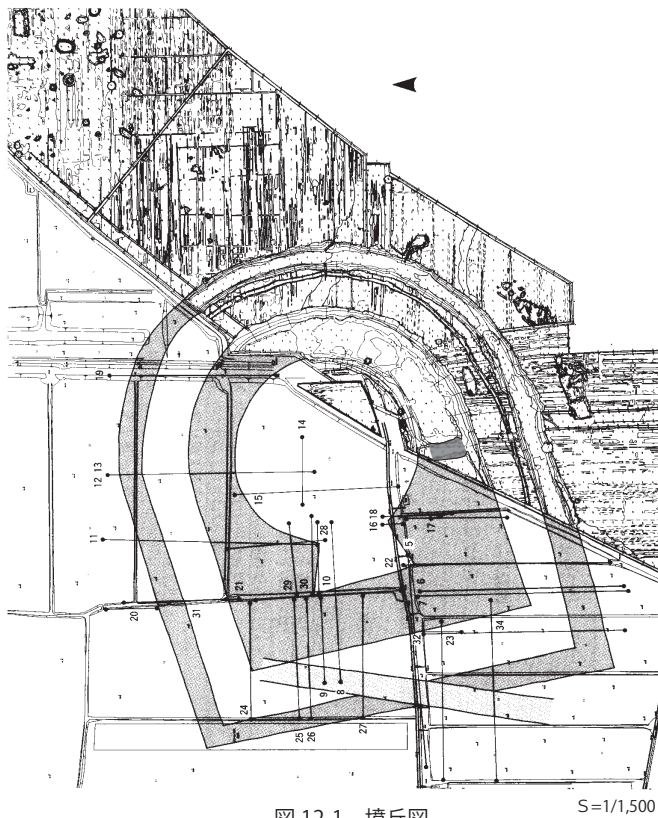


図 12-1 墳丘図

S=1/1,500

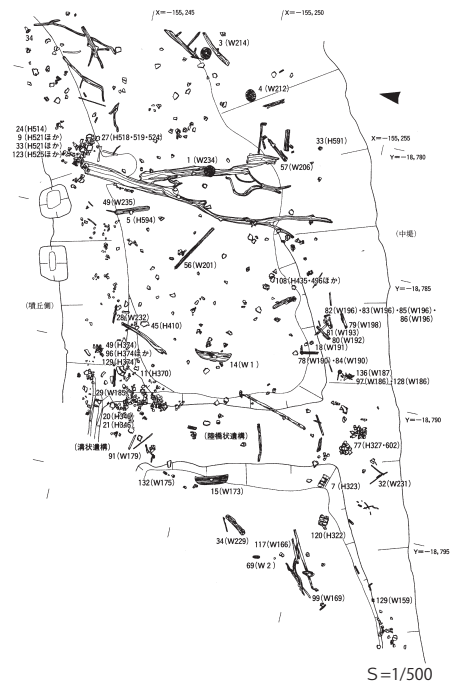


図 12-2 渡り土手検出遺構と出土遺物

図 12 奈良県 水晶塚古墳

## 大阪府

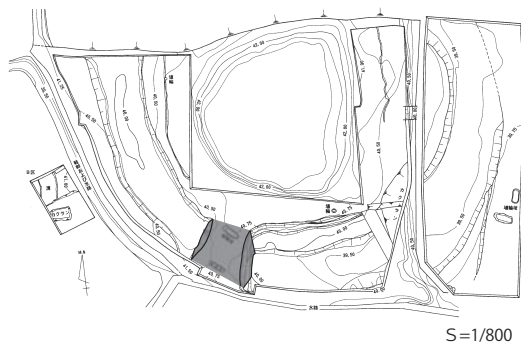


図 13-1 墳丘図

S=1/800

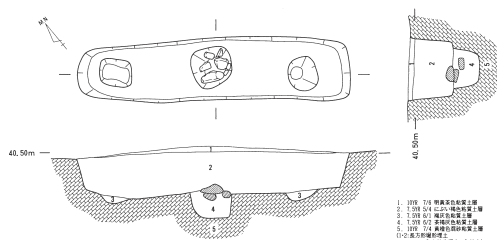


図13-2 渡り土手上面 長方形土坑

S=1/50

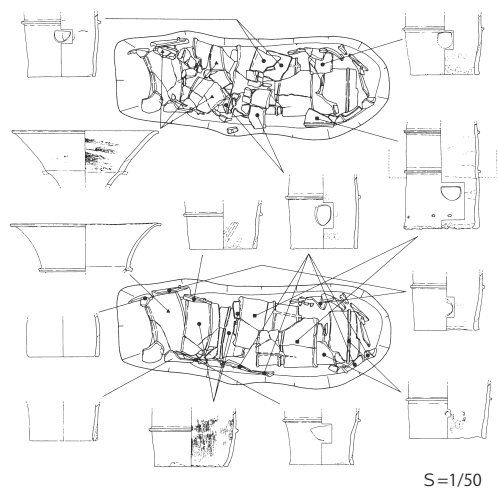


図 13-3 渡り土手上面 埴輪棺

S=1/50

図 13 大阪府 五手治古墳



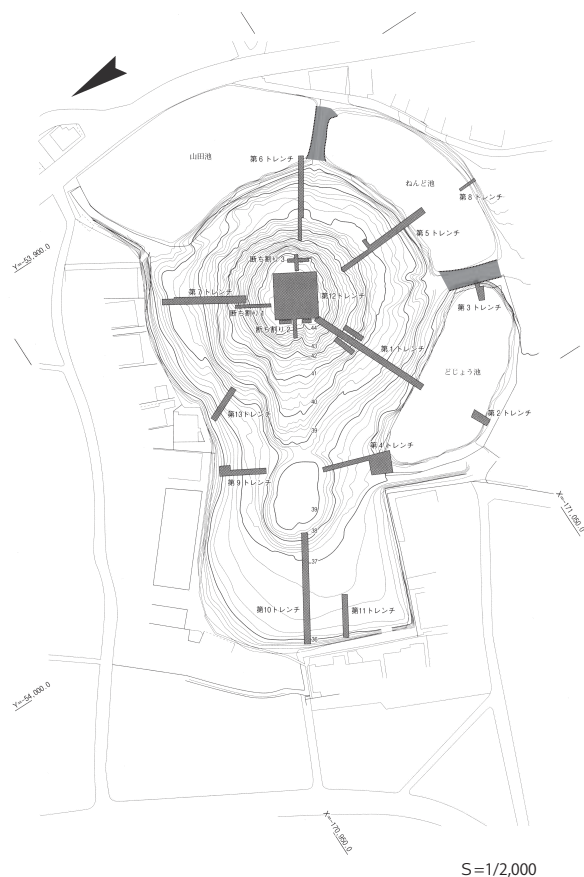


図 14-1 墳丘トレンチ配置図

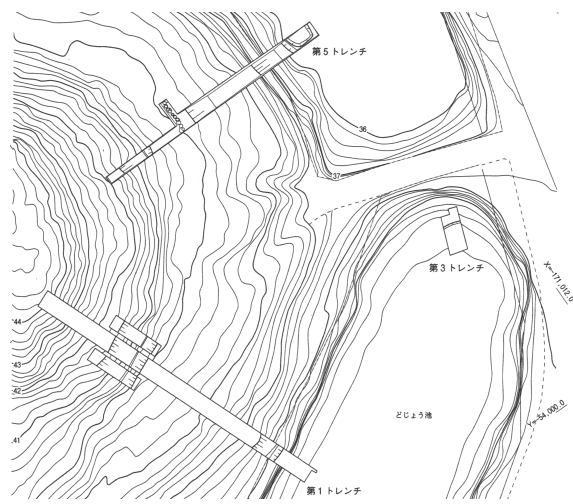


図 14-2 後門部南側渡り土手

S=1/500

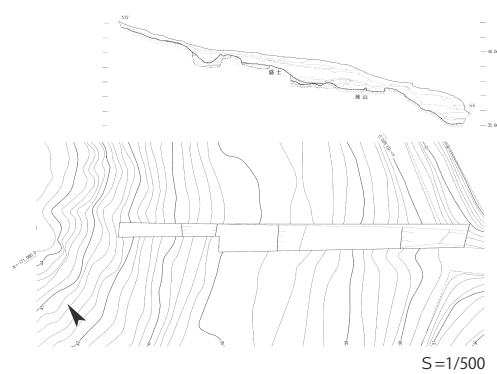


図 14-3 後門部主軸付近渡り土手（第6トレンチ）

S=1/500

## 図 14 大阪府 久米田貝吹山古墳

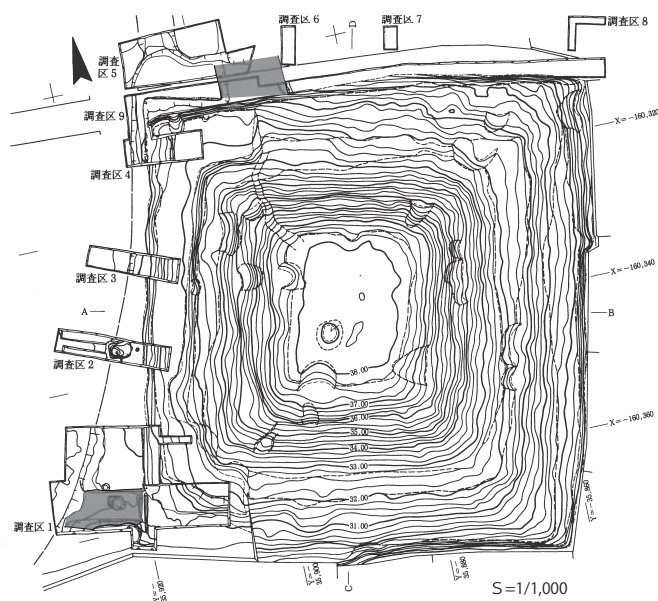


図 15-1 墳丘図

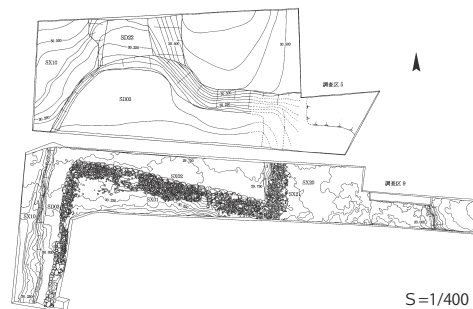


図 15-2 北側渡り土手（調査区5）

S=1/400

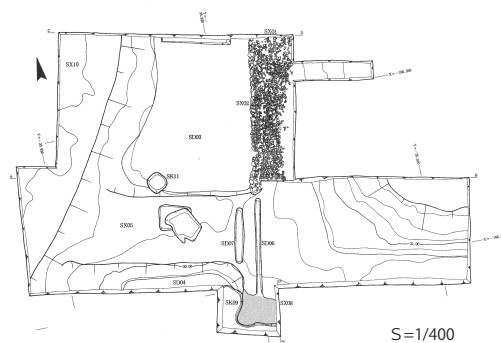


図 15-3 西側渡り土手（調査区1）

S=1/400

## 図 15 大阪府 向墓山古墳

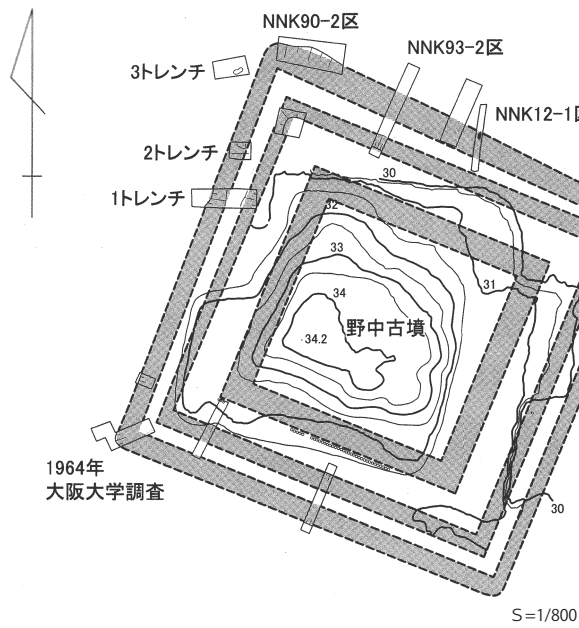


図 16-1 墳丘復元図

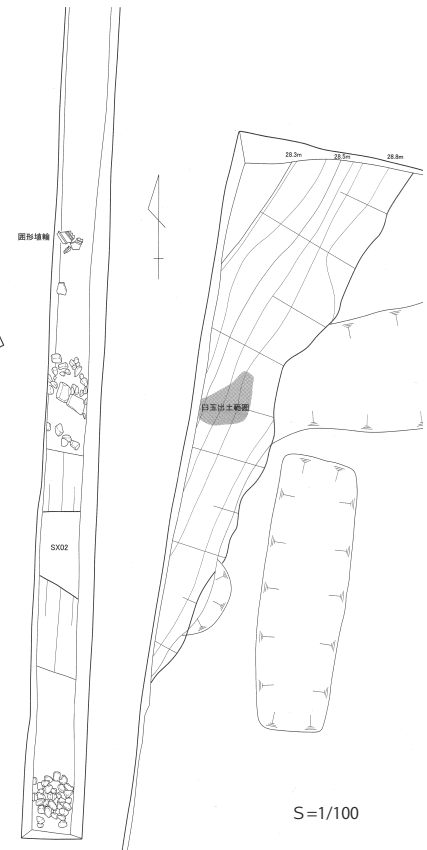


図 16-2 渡り土手検出遺構図

図 16 大阪府 野中古墳

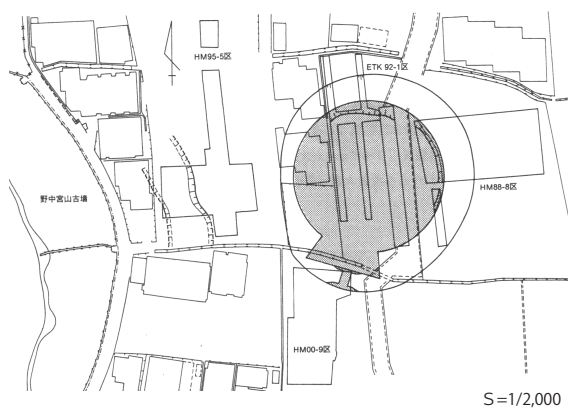


図 17-1 墳丘復元図

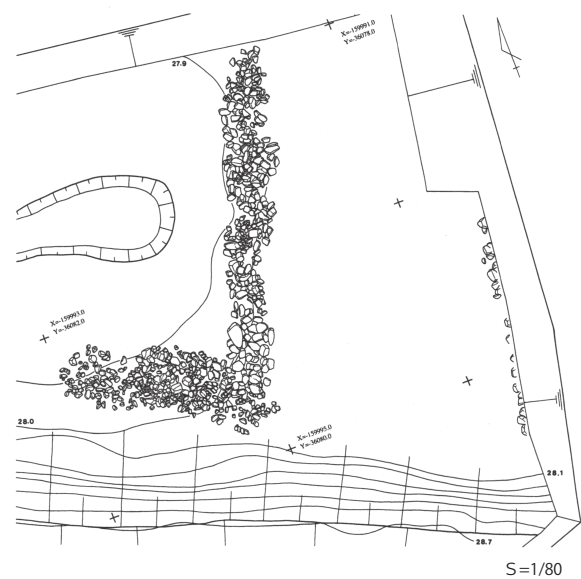


図 17-2 渡り土手検出遺構図

図 17 大阪府 越中塚古墳

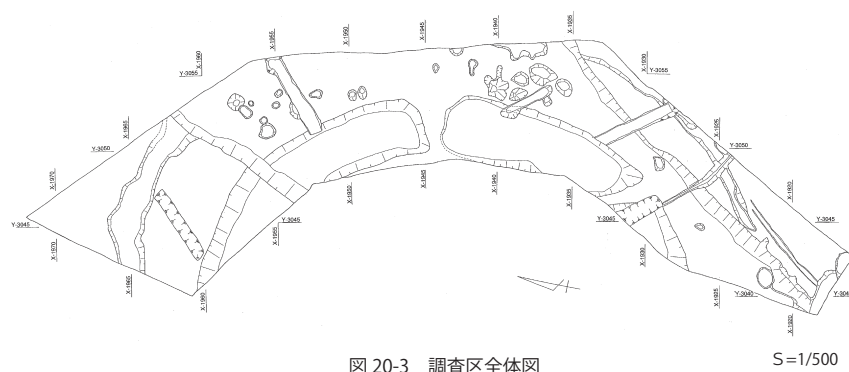
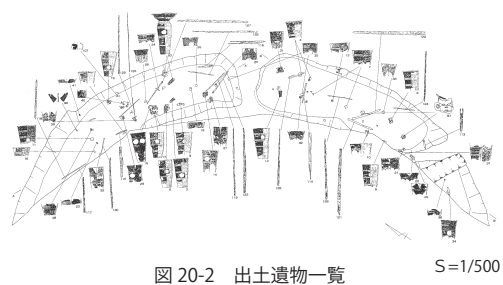
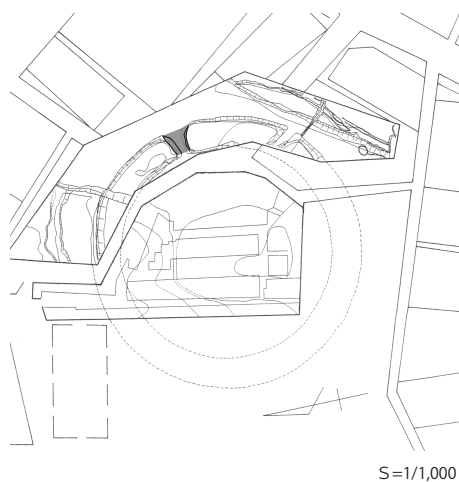
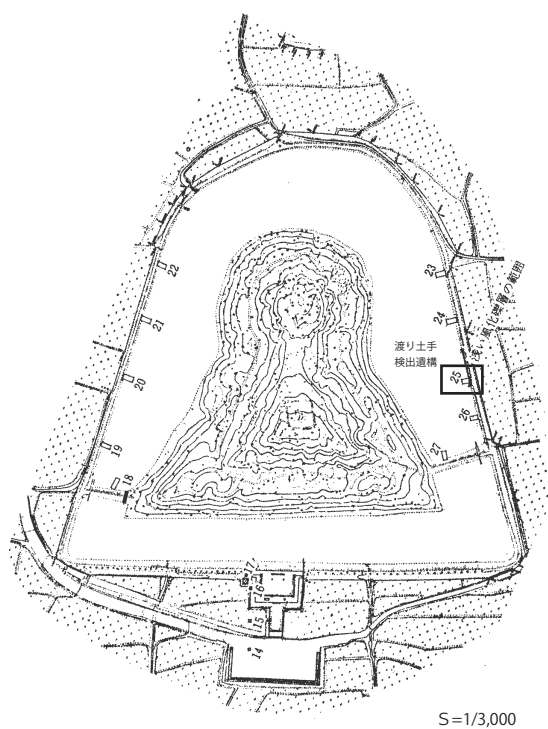


図 20 大阪府 普賢寺古墳



## 京都府

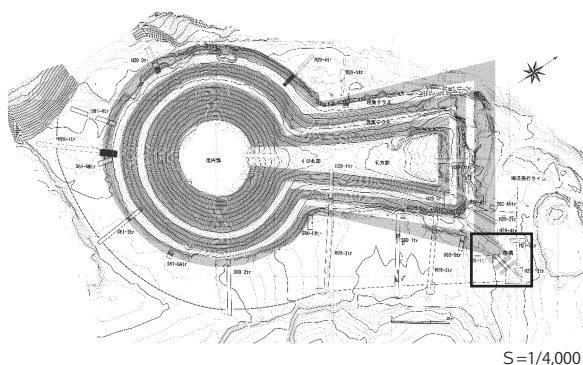


図 21-1 墳丘図

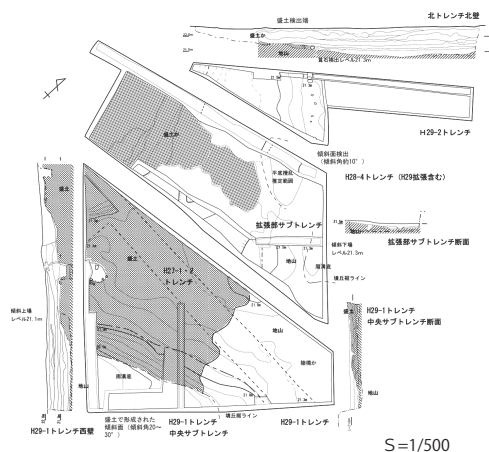


図 21-2 渡り土手検出遺構図

図 21 京都府 網野銚子山古墳

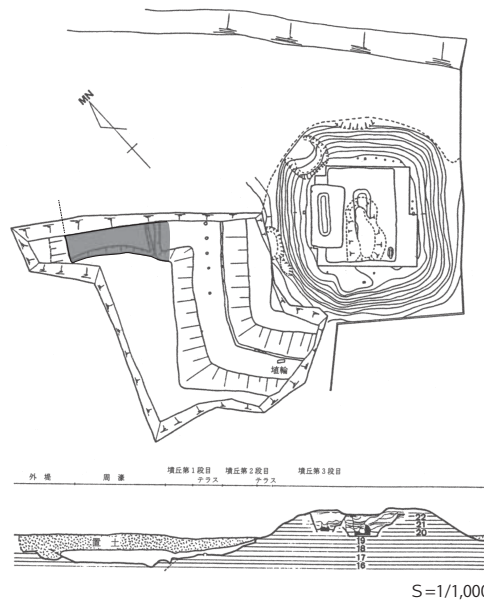


図 22 京都府 ヒル塚古墳

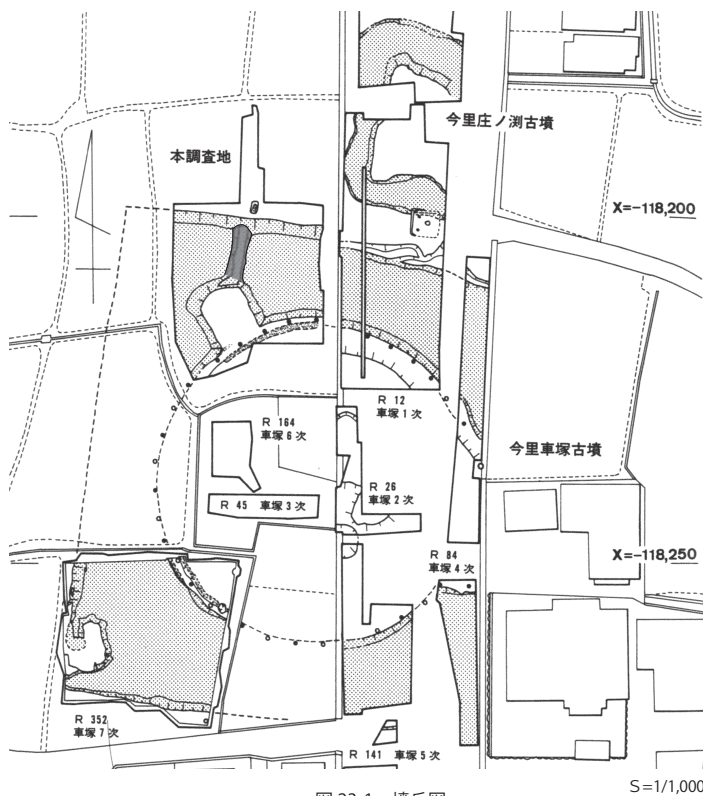


図 23-1 墳丘図

図 23 京都府 今里車塚古墳

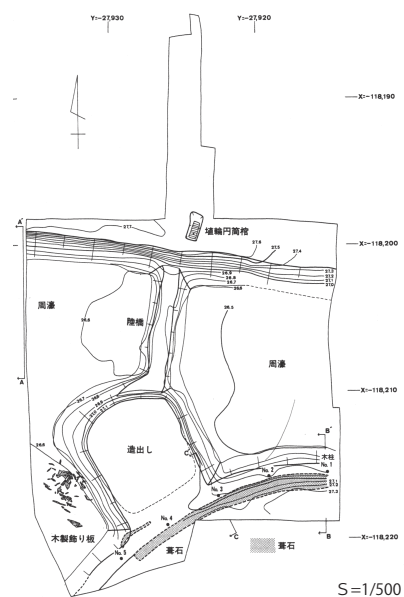


図 23-2 渡り土手検出遺構図





## 兵庫県

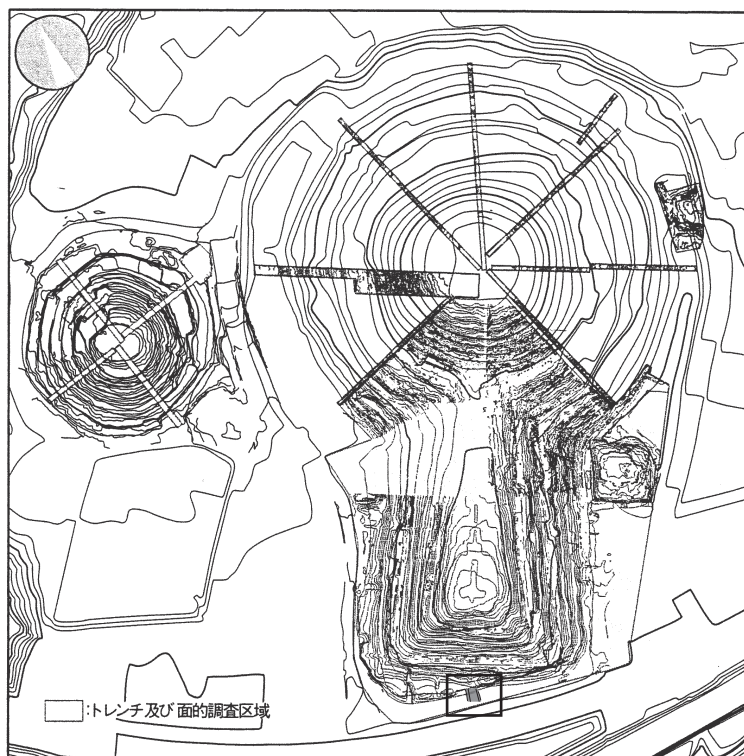


図 28-1 墳丘図

S=1/2,000

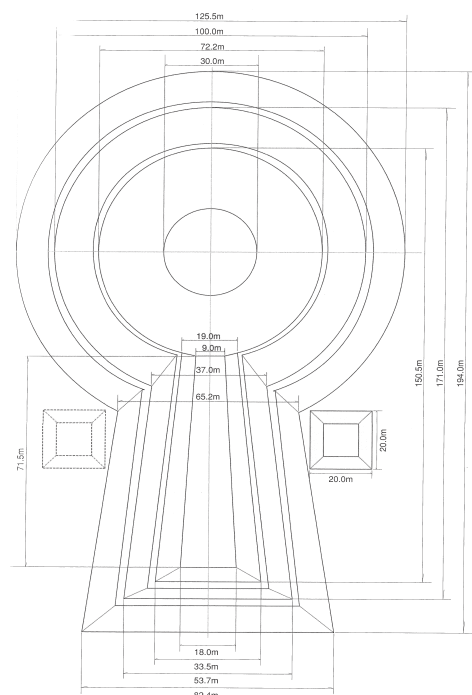


図 28-2 墳丘復元模式図 1

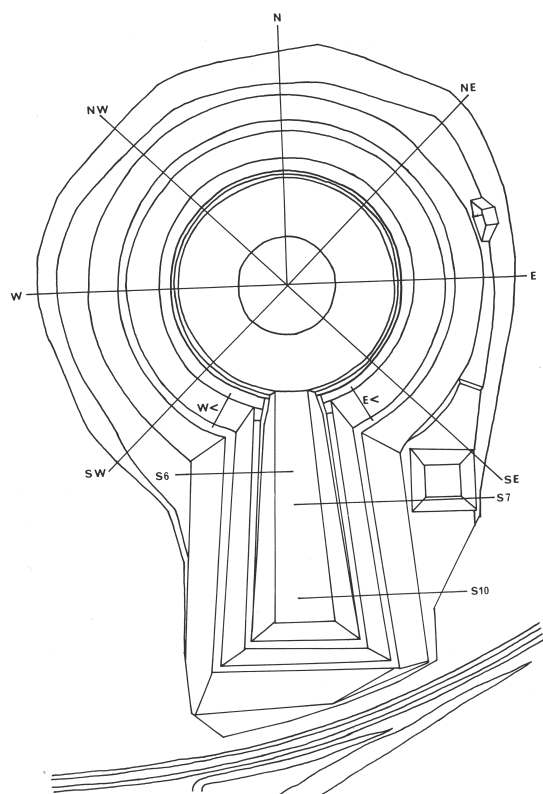


図 28-3 墳丘復元模式図 2



図 28-4 東側くびれ部付近 濠底傾斜面

S=1/500



図 28-5 渡し土手検出遺構図

S=1/200

## 図 28 兵庫県 五色塚古墳

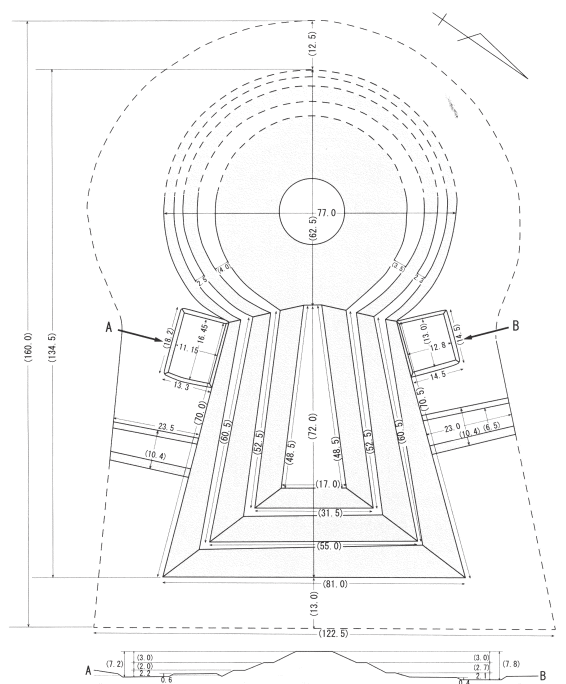


図 29-1 墳丘復元図

(図中数字の単位はすべてm)

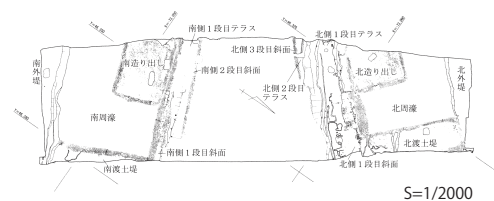
 $S=1/2000$ 

図 29-2 渡り土手検出遺構図

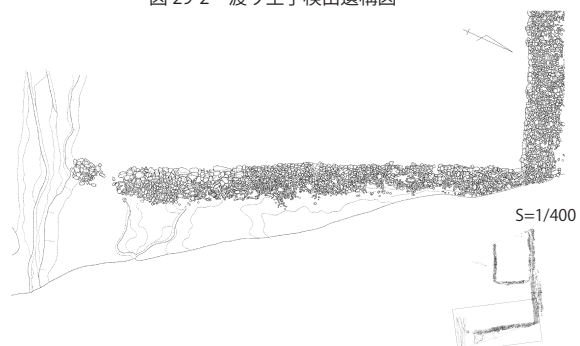
 $S=1/2000$ 

図 29-3 南側渡り土手

$$S=1/400$$


図 29-4 北側渡り土手

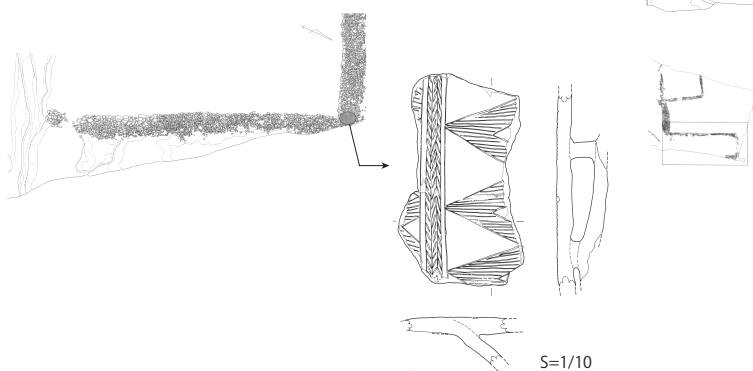
$$S=1/400$$


図 29-5 南側渡り土手出土 盾形埴輪片

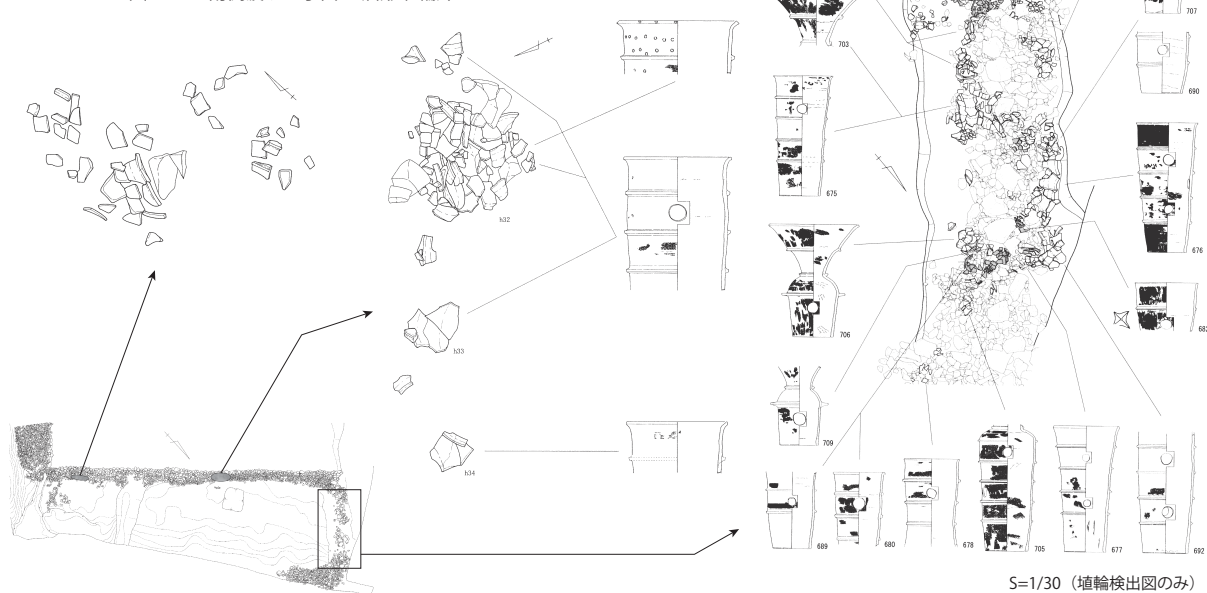
$$S=1/10$$


図 29-6 北側渡り土手出土埴輪

S=1/30 (埴輪検出図のみ)

図 29 兵庫県 池田古墳



## 注

- 1) これと同じ事例として扱えるかはわからないが、奈良県市庭古墳では1962・63年の調査で排水溝が検出されている(宮沢1976)。
- 2) 白石はこのような周濠の出現は古墳時代前期後半からと理解し箸墓古墳には遡らないとした(白石1983)。一瀬和夫も渡り土手の開始を前期後半とし、箸墓古墳には周濠がないとした(一瀬1992)。周溝と周濠をどのように定義するかという問題があるが、墳丘の周囲にめぐらす溝状の遺構が弥生時代の墳墓からみられるのは確実である。その後、箸墓古墳周辺の発掘調査により、渡り土手が検出された。
- 3) 30m以下の墳丘についても一部補足として集成に加えた。和田・下垣2017では、近畿7都道府県の30m以上の古墳が集成されており、このリストの掲載古墳から渡り土手を集成した。
- 4) 岸本直文氏よりご教示を得た。
- 5) 従来指摘の通り、死者を舟形の棺に納める舟葬と、船を用いて死者を運ぶ思想の違いにも考慮する必要がある(小林1944、磯部1983)。
- 6) 舟棺を用いた例は、紀元前4世紀末の中国四川省巴県冬笋壩や、商、周から戦国時代とされる福建省崇安県武夷山など中国でも見つかっている(磯部1983)。しかし、古墳時代の舟棺との関連を想定するには時間的な隔たりが大きい。
- 7) 春秋時代の八咫墩越国王陵には濠があり水が湛えられていたとされる。土墩墓等に濠のある事例はあるものの、水濠であったかは不明瞭であり時期的な隔たりも大きい。
- 8) 四隅突出墓など弥生時代にも複数の渡り土手(陸橋)がとりつく墳墓はあるが、埋葬施設に対して同じ距離の同質的な渡り土手である点に特徴がある。これに対し、前方後円墳には埋葬施設への距離の異なる渡り土手が複数とりつき、これらの渡り土手の中には埋葬施設や儀礼の道とは関係せず、作業道としてのみ使用されるものも出現したと推定される。

## 引用・参考文献

- 青柳泰介 2003「導水施設考－奈良県御所市・南郷大東遺跡の導水施設の評価をめぐって－」『古代学研究』第160号、古代学研究会、pp.15-35
- 青柳泰介 2010「ヤマト王権の水とマツリ」『導水施設と埴輪群像から見えてくるもの』滋賀県立安土城考古博物館、pp.96-109
- 磯部武男 1983「古代日本の舟葬について(上)」『信濃』第35巻12号、信濃史学会、pp.29-45
- 一瀬和夫 1992「周堤」『古墳時代の研究第7巻 墳丘と内部構造』雄山閣、pp.49-59
- 内田勝彦編 2018『ニサンザイ古墳発掘調査報告書』百舌鳥古墳群の調査11、堺市教育委員会
- 賀来孝代 2002「埴輪の鳥」『日本考古学』第14号、日本考古学協会、pp.37-52
- 堅田直 1971「前方後円墳の立地と周濠構造」『歴史研究』第7・8合併号、歴史研究編集委員会、pp.85-115
- 城門義廣編 2015『延永ヤヨミ園遺跡Ⅲ区Ⅱ(第1分冊)』九州歴史資料館
- 岸本直文 2005「墳丘と周濠」『講座日本の考古学8 古墳の時代(下)』青木書店、pp.405-429
- 小林行雄 1937「前方後円墳」『考古学』第8巻第1号、東京考古学会、pp.1-14
- 小林行雄 1944『西宮』第3号(小林行雄1976「舟葬説批判」『古墳文化論考』、pp.179-201に再録)
- 近藤義郎 1983『前方後円墳の時代』岩波書店
- 近藤義郎 1999「後円部とはいかなるものか」『季刊古代史の海』第17号、pp.45-69(近藤義郎2000『前方後円墳観察への招待』青木書店に改訂収録)
- 白石太郎 1983「古墳の周濠」『角田文衛博士古希記念古代学論叢』角田文衛博士古希記念事業会、pp.125-146
- 清野孝之 2018「佐紀陵山古墳西渡土堤の立会調査の見学」『考古学研究』第65巻第2号、考古学研究会、pp.19-21
- 高橋裕子 2009「前方後円墳周濠の渡り土手について」『牧野車塚古墳・禁野車塚古墳・宮道古墳・大宅廃寺瓦窯跡』京都橘大学文化財調査報告2008、京都橘大学文学部、pp.23-37
- 高槻市立今城塚古墳歴史館 2014『古墳時代の船と水運』p.19



- 辰巳和弘 2015「船の“かたち”と喪葬の習俗」『古墳とは何か』近つ飛鳥博物館、pp.117-129
- 都出比呂志 1979「前方後円墳出現期の社会」『考古学研究』第26巻第3号、考古学研究会、pp.17-34
- 宮沢智士 1976「第三章遺跡4. 市庭古墳」『平城宮発掘調査報告Ⅶ』奈良国立文化財研究所、pp.53-54
- 浜田耕作 1936「前方後円墳の諸問題」『考古学雑誌』第26巻第9号、日本考古学会、pp.1-13
- 宮崎県教育委員会 2012『特別史跡西都原古墳群 地中探査・地下マップ制作事業報告書』
- 和田晴吾 2009「古墳の他界観」『国立歴史民俗博物館研究報告』第152集、国立歴史民俗博物館、pp.247-272
- 和田晴吾 2015「古墳からみた葬送儀礼と他界観」『古墳とは何か』近つ飛鳥博物館、pp.110-116
- 和田晴吾・下垣仁志 2017『畿内の首長墳』立命館大学文学部考古学・文化遺産専攻

## 表1・2 参考文献

- 橋本輝彦 1999「纏向遺跡第109次調査概要報告（箸墓古墳隣接地）」『桜井市立埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書第20集 桜井市平成10年度国庫補助事業に伴う発掘調査報告書』（財）桜井市文化財協会
- 橋本輝彦 2002「纏向遺跡第109次出土の木製輪鍔」『古代武器研究』第3号、古代武器研究会
- 松本弘明編 2000『天理市埋蔵文化財調査報告第7集 西殿塚古墳・東殿塚古墳』天理市教育委員会
- 笠尾毅 1979「景行天皇陵渡土堤改修区域の調査」『書陵部紀要』第30号、宮内庁書陵部
- 福尾正彦 1987「狭木之寺間陵整備工事区域の調査」『書陵部紀要』第38号、宮内庁書陵部
- 福尾正彦・徳田誠志 1991「狭木之寺間陵整備工事区域の調査」『書陵部紀要』第43号、宮内庁書陵部
- 松本洋明編 1994『赤土山古墳第2次範囲確認調査概報』天理市教育委員会
- 福尾正彦 1996「狭城盾列池後陵整備工事区域の事前調査」『書陵部紀要』第48号、宮内庁書陵部
- 福辻淳編 2015『茅原大墓古墳 第1次～第6次発掘調査報告』桜井市埋蔵文化財発掘調査報告書第43集、桜井市教育委員会文化財課
- 泉武編 1990『星塚・小路遺跡の調査』天理市文化財調査報告第4集、天理市教育委員会
- 坂靖編 2006『八条遺跡』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第94冊、奈良県教育委員会
- 南部裕樹等編 2016『立命館大学文学部学芸員課程研究報告第19冊—久米田古墳群発掘調査報告—』立命館大学文学部
- 笠野毅 1981「河内坂門原陵外堤護岸工事区域及び陵前排水枘設置個所の説査」『書陵部紀要』第32号、宮内庁書陵部
- 江浦洋編 1998『蔵塚古墳—南阪奈道路建設に伴う後期前方後円墳の発掘調査—』大阪府文化財センター調査報告書第24集、（財）大阪府文化財センター
- 京丹後市教育委員会文化財保護課 2017『平成29年度 史跡網野銚子山古墳発掘調査現地説明会資料』京丹後市教育委員会
- 山本輝雄・中島皆夫・原秀樹 1996「右京第488次（7ANITT-15地区調査略報）」『長岡京市埋蔵文化財センター年報平成6年度』（財）長岡京市埋蔵文化財センター
- 小泉裕司他 2018「久津川車塚古墳の調査」『城陽市埋蔵文化財調査報告書第75集』城陽市教育委員会
- 城陽市教育委員会 2018『久津川車塚古墳2018年度発掘調査の概要』（現地説明会資料）
- 山口博 1983「長岡京跡右京第105次発掘調査概要（7ANITT-10地区）」『京都府遺跡発掘調査概報第8冊』（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 山口博 1984「長岡京跡右京第83・105次発掘調査概要（7ANINC-2・3, IHT,IFK, IMK地区）」『京都府遺跡発掘調査概報第9冊』（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 丸山潔編 2006『史跡五色塚古墳 小壺古墳発掘調査・復元整備報告書』神戸市教育委員会
- 山田清朝編 2015『池田古墳』兵庫県教育委員会
- 黒坂秀樹・沢村治郎 2005「姫塚古墳」『高月の主要古墳Ⅰ』高月町教育委員会
- 藤田和尊・木許守編 2001『鴨都波1号墳調査概報』学生社
- 高橋浩二 2000「五手治古墳」『羽曳野市遺跡調査報告書38』羽曳野市教育委員会
- 高野学・伊藤聖浩 1990「向墓山古墳」『羽曳野市遺跡調査報告書20』羽曳野市教育委員会
- 山田幸弘 1991「野中古墳 NNK90-1区」『石川流域遺跡群発掘調査報告Ⅵ』藤井寺市教育委員会

28. 松田崇裕・山田幸弘 2018「第4章 野中古墳の調査」『石川流域遺跡群発掘調査報告 XXXⅢ』藤井寺市教育委員会
29. 佐々木理 2003『石川流域遺跡群発掘調査報告 XⅧ』藤井寺市教育委員会
30. 宇治原靖泰等編 2000『門真市埋蔵文化財発掘調査報告第7集 普賢寺古墳 門真市石原東・幸福北土地  
区画整理事業に伴う発掘調査報告書』門真市教育委員会
31. 栢井豊成編 1990『ヒル塚古墳発掘調査概報』八幡市教育委員会
32. 和田晴吾・山本雅和編 1992『立命館大学文学部学芸員課程研究報告第4冊—鳴谷東古墳群第3・4次発  
掘調査概報—』立命館大学文学部
33. 安藤信策編 1976『大覚寺古墳群発掘調査概報（1976）』京都府教育委員会

(長友朋子 本学文学部教授)  
(園原悠斗 本学文学部博士前期課程)  
(前田仁暉 本学文学部4回生)  
(山崎公輔 本学文学部4回生)